



令和5年度 郡山市中學生長崎派遣事業

2023

ナガサキへのメッセージ

報告書



郡山市核兵器廃絶都市宣言

(昭和59年6月15日議決)

世界恒久平和実現のために、核兵器を廃絶することは、人類共通の願望である。

核兵器は人類と地球の命運を左右するにもかかわらず、新しい軍事技術の開発が続けられている。

わが国は、世界で唯一の核被爆国として、平和を愛するすべての国の人々とともに、人類の安全と生存のため不断の努力を続けるべきである。

郡山市は、日本国憲法に基づいて、核兵器の完全廃絶と軍備縮小を全世界に訴え、人類の願いである世界平和の実現を希求し、核兵器廃絶都市であることを宣言する。



令和5年度 郡山市中学生長崎派遣事業

「2023 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市長 品川 萬里

1945年8月。広島と長崎に投下された原子爆弾により、街は一瞬にして廃墟と化し、数多くのかげがえのない命が奪われました。また、今なお多くの被爆者の方々が後遺症で苦しんでおられます。

本市におきましても、4度にわたる空襲により大きな被害を受け、500名を超える尊い命が犠牲となりました。あの悲惨な戦争の終結から78年が経過し、戦争の記憶が風化しつつある今、私たちは当たり前のように平和を享受しております。

しかし、世界情勢は大きく変化しており、世界各国で武力が行使され、また、核の脅威が高まり、国際社会の平和と秩序が脅かされる今、私たちは平和について、これまで以上に考えなければならない状況にあります。

今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれた、かけがえのないものであることを決して忘れてはなりません。

被爆者の平均年齢が85歳を超え、被爆者が減少していく中で、今後、核兵器使用により引き起こされた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、その廃絶を願う全ての人々の思いを引き継ぎ、次の世代に伝えていくことは、平和な時代に生きる私たちの使命であります。

そのため、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市では、「平和を考える市民の集い実行委員会」との共催により、1996年から次代を担う中学生を被爆地へ派遣する事業を実施しており、今年も、市内各校の代表生徒に役員を加えた派遣団32名を長崎市へ派遣いたしました。

台風6号の影響により日程は一部変更となりましたが、参加された中学生の皆さんは、原爆資料館や永井隆記念館、旧城山国民学校校舎の見学をはじめ、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話や平和学習などへの参加を通して、戦争の悲惨さや原子爆弾による被害の恐ろしさ、命の大切さなど、たくさんのことを学んだことと思います。

中学生の皆さんには、被爆地長崎での経験を今後の成長の糧にさせていただくとともに、4日間の研修を通して学んだことを家族や友人などできるだけ多くの方々に話し、平和の大切さを伝えていただきたいと思います。

この報告書には、参加された中学生28名が、平和の尊さや核兵器廃絶の必要性について学んだことや感じたことについて、それぞれの言葉でまとめられています。この報告書が一人でも多くの方々にご覧いただけることを願うとともに、平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

長崎市の皆様には、当市派遣団を今年も温かく迎え入れていただき、この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。

結びに、本事業の実施に当たり多大なる御支援、御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝を申し上げます、挨拶といたします。



令和5年度 郡山市中學生長崎派遣事業

「2023 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市教育委員会教育長 小野 義明

市内の中学校・義務教育学校から選出された皆さんは、令和5年度郡山市中學生長崎派遣団員として、令和5年8月7日から4日間長崎市を訪問しました。長崎市長に「平和へのメッセージ」を伝える重要な役割を担った皆さんは、きっと平和の尊さや核兵器廃絶の必要性を強く認識されたことと思います。

78年前の8月9日、原子爆弾の投下により、長崎の街は一瞬で焼け野原となり、多くの尊い命が奪われました。被爆された方々は、癒えることのない傷を負い、今もなお、後遺症や健康への強い不安に苦しみ続けています。さらに、被爆者の高齢化が進み、被爆体験の記憶を今後どう受け継いでいくのかが問われております。

そのような中、これからの時代を担う皆さんが、台風の影響のある中で、長崎平和公園や爆心地公園、原爆資料館を見学したこと、被爆者の方の話を直接聞くことができたことなどは、平和への思いを受け継ぐ意味で、とても意義深いことであると感じています。皆さんが長崎の地に実際に立ち、自らの目で確かめ、青少年ピースフォーラム等への参加や、意見交換等を行った体験は、未来の平和を考える上で、きっと大きな財産になったことと思います。

この報告書は、長崎で様々なことを体験した皆さんが、実際に感じ取ったことを、平和へのメッセージとしてまとめたものです。どのページを見ても、一人一人の平和への思いが、それぞれの言葉でつづられています。私は、参加した皆さん全員が、核兵器が及ぼす悲惨さや、平和の大切さに触れるとともに、「未来の平和」のために自分自身ができることに取り組んでいこうとする強い決意を述べていることに、大きな感動を覚えました。

皆さんには、この派遣事業を通して学んだことを多くの方々に語り伝えるとともに、平和で持続可能な社会の担い手として健やかに成長することを切に願っております。

結びに、所期の目的を達成され、立派な報告書を完成させた皆さんと、派遣に御尽力いただいた関係者の皆様をはじめ、御協力をいただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本市の中学生を温かく受け入れ、全世界に向けた長崎平和宣言の中で「長崎は広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島をはじめ、平和を希求するすべての人々と連帯し、『平和の文化』を世界に広め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します」というメッセージを発信された長崎市長をはじめ、長崎市の皆様の益々の御健勝と、長崎市の御発展を御祈念申し上げ、挨拶いたします。

目 次

【 事 業 内 容 】

平和へのメッセージ	1
事業概要	3
派遣団名簿	5
研修行程	6

【 研 修 風 景 】

集合写真	7
写真で綴る研修風景	8

【 団 員 報 告 】

安 齊 凜 成	(日 和 田 中 学 校)	13
安 藤 一 伽	(行 健 中 学 校)	15
折 内 心 優	(明 健 中 学 校)	17
古 川 隼 也	(安 積 中 学 校)	19
柴 原 ひ ま り	(安 積 第 二 中 学 校)	21
鈴 木 新 菜	(三 穂 田 中 学 校)	23
古 川 美 玖	(逢 瀬 中 学 校)	25
大 内 陽	(片 平 中 学 校)	27
加 藤 優 奈	(喜 久 田 中 学 校)	29
藤 田 浩 輔	(熱 海 中 学 校)	31
石 井 皇 誠	(守 山 中 学 校)	33
伊 藤 涼 世	(高 瀬 中 学 校)	35
山 口 雄 奨	(郡 山 第 一 中 学 校)	37
十 林 權	(郡 山 第 二 中 学 校)	39
佐 久 間 美 和	(郡 山 第 三 中 学 校)	41
七 海 聖 恋 亜	(郡 山 第 四 中 学 校)	43
菅 家 琴 芭	(郡 山 第 五 中 学 校)	45
七 海 弥 麻 人	(郡 山 第 六 中 学 校)	47
川 島 璃 子	(郡 山 第 七 中 学 校)	49
原 田 陽 仁	(緑 ケ 丘 中 学 校)	51
佐 藤 雪 乃	(富 田 中 学 校)	53
紺 野 煌 斗	(大 槻 中 学 校)	55
景 山 里 桜	(小 原 田 中 学 校)	57
熊 田 菜 々 美	(宮 城 中 学 校)	59
滝 田 梨 乃	(御 館 中 学 校)	61
木 村 美 結	(郡 山 ザ ベ リ オ 学 園 中 学 校)	63
石 井 勝	(西 田 学 園)	65
増 子 佳 穂	(湖 南 小 中 学 校)	67

§ 事業内容 §

平和へのメッセージ

戦後78年を迎え、原子爆弾で亡くなられた多くの方々に哀悼の意を捧げます。

また、今なお被爆による後遺症治療に努められている皆様にお見舞いを申し上げます。

貴市におかれましては、市民の皆様のたゆまぬ御努力により、原子爆弾の凄絶な被害を乗り越えられ、今日の発展を築かれました。

また、平和に対する揺るぎない御意思のもと、世界の先頭に立ち、言語に絶する惨状を日本国内はもとより世界中の人々に伝え、「世界の恒久平和」と「核兵器廃絶」の実現を目指し、積極的な活動を長年にわたり展開されておりますことに、心から敬意を表します。

終戦から78年が経過し、戦争や核兵器の惨禍を知らない世代となりつつある中で、戦争や被爆の記憶を次の世代にどう受け継いでいくのかは全国民の課題であります。

当市では、今日の平和が、多くの方々の犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを次の世代に伝えていく責務があるとの認識のもと、次代を担う中学生を貴市に派遣し、「戦争の悲惨さ」や「平和の持つ意義」を深く理解するとともに、全国から集まる同世代の仲間たちと意見を交わし合うことを目的として、様々な研修活動に参加させていただきます。

この貴重な経験を通して、参加者一人ひとりが「核兵器廃絶のために必要なこと」や「平和のために自らができること」を学び感じ取り、同世代の青少年をはじめとする多くの人々に伝えてくれるものと期待しております。

現在もなお、世界各地において武力が行使され、また、核の脅威が高まり、国際社会の平和と秩序が脅かされる事態が進行しておりますが、貴市の惨禍は我が国の惨禍と受け止め、二度と繰り返されることのないよう、国際社会全体が連帯・信頼のもと、「核兵器のない世界」そして「世界の恒久平和」の実現に向け、不断の努力を重ねてまいります。

結びに、「核兵器廃絶」及び「世界の恒久平和」の実現を目指し、貴市の益々の御発展並びに長崎市民の皆様の御健勝と御活躍を心から御祈念申し上げまして、メッセージといたします。

令和5年8月9日

長崎市長 鈴木 史朗 様

郡山市長

品川 萬里

令和5年9月29日

郡山市

市長 品川 萬里 様

長崎市長 鈴木 史朗

平和メッセージに対する御礼

残暑の候、貴台におかれましてはますます御清栄のこととお喜び申し上げます。

去る8月9日に挙行いたしました「被爆78周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に際し、貴台から「平和メッセージ」を賜りましたことに、心から御礼を申し上げますとともに、貴台の平和に対する深い御理解と御協力に、重ねて感謝申し上げます。

今年の平和祈念式典は、台風6号接近に伴い、参列いただく皆様の安全を第一に考え、会場を屋内に変更し、原則、主催者（長崎市）のみで行いました。

このため、御参列を予定していただいていた御来賓や一般参列者等の皆様には多大な御迷惑をおかけすることになり、誠に申し訳ありませんでした。苦渋の決断ではございましたが、何とぞ御理解のほどよろしくお願いいたします。

核兵器を巡る国際情勢は依然として厳しい状況が続いていますが、私たち長崎市民は、全人類共通の願いである「核兵器のない世界」の一日も早い実現のため、平和への道を歩んでまいりますので、志を同じくする力強く大切な仲間として、今後とも共に取り組んでいただきますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、貴台の御健勝と今後ますますの御活躍を心からお祈り申し上げます。

令和5年度 郡山市中学生長崎派遣事業 「2023 ナガサキへのメッセージ」 事業概要

1 趣旨

市民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを忘れてはならない。

これを次代に伝えるのが今日に生きる私達の使命であると考え、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市における平和への取り組みとして、平和の尊さや核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的に、感受性豊かな中学2年生を被爆地である長崎市へ派遣して、研修活動を実施する。

また、報告会及びパネル展の開催や報告書の作成・配布等を通して、本市の取り組みについて広く市民への周知を図る。

2 主催

郡山市／平和を考える市民の集い実行委員会

3 事業内容

(1) 派遣団結団式及びオリエンテーション

ア 開催日 令和5年7月27日(木)

イ 会場 郡山市役所特別会議室

ウ 内容 団員証交付、「平和へのメッセージ」付託、「折り鶴」付託、
団長及び団員代表あいさつ

(2) 派遣研修

ア 派遣先 長崎市

イ 派遣人員 団員28名、役員4名(団長、副団長、支援者、事務局各1名)

ウ 派遣期間 令和5年8月7日(月)～10日(木)

エ 研修内容

(ア) 永井隆記念館(如己堂)見学(8月7日)

(イ) 平和公園及び長崎原爆資料館見学(8月8日)

(ウ) 「平和へのメッセージ」伝達(8月8日)

(エ) 青少年ピースフォーラム(平和学習)参加(8月8日)

(オ) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典視聴(8月9日)

※台風6号の影響により当初の行程から一部変更。

(3) 郡山市戦没者追悼式

平和の尊さを次の世代に継承するため、式の中で郡山市中學生長崎派遣事業に参加した中學生代表による「平和へのメッセージ」の発表

ア 発表者 代表者3名

イ テーマ 「平和へのメッセージ」

(4) 報告会

ア 開催日 令和5年11月25日(土)

イ 会場 郡山市役所特別会議室

ウ 内容

(ア) 被爆体験伝承者講話

(イ) 派遣団員による研修報告

(5) 写真パネル展・原爆パネル展

派遣団員が研修を通して撮影した写真に自身のメッセージを添えて展示する「写真パネル展」及び原爆に関する資料を展示する「原爆パネル展」の開催

ア 第1回

(ア) 期間 令和5年11月25日(土)～12月8日(金)

(イ) 会場 郡山市役所アートスペース

イ 第2回(予定)

(ア) 期間 令和6年2月1日(木)～15日(木)

(イ) 会場 郡山市中央公民館

(6) 報告書

派遣団員による研修の成果をまとめた、『令和5年度郡山市中學生長崎派遣事業「2023 ナガサキへのメッセージ」報告書』の作成、配布

令和5年度 郡山市中學生長崎派遣団名簿

役員

役職名	氏名	所属
団長	かぶらぎ 木 辰 男	郡山市総務部行政マネジメント課長
副団長	いまいずみ 今 泉 光 一	平和を考える市民の集い実行委員会監事
支援者	よした 吉 田 雅 史	郡山市立郡山第七中学校教諭
事務局	おおわだ 大 和田 千 尋	郡山市総務部総務法務課総務管理係主事

団員

番号	学校名	氏名
1	日和田中学校	あんざい りんせい 安 齊 凜 成
2	行健中学校	あんどう いちか 安 藤 一 伽
3	明健中学校	おりうち ここな 折 内 心 優
4	安積中学校	ふるかわ しゅんや 古 川 隼 也
5	安積第二中学校	しばはら ひまり 柴 原 ひまり
6	三穂田中学校	すずき にいな 鈴 木 新 菜
7	逢瀬中学校	ふるかわ みく 古 川 美 玖
8	片平中学校	おおうち よう 大 内 よう 陽
9	喜久田中学校	かとう ゆうな 加 藤 優 奈
10	熱海中学校	ふじた こうすけ 藤 田 浩 輔
11	守山中学校	いし井 こうせい 石 井 皇 誠
12	高瀬中学校	いとう すずよ 伊 藤 涼 世
13	郡山第一中学校	やまぐち ゆうすけ 山 口 雄 奨
14	郡山第二中学校	とばやし かい 十 林 楷

番号	学校名	氏名
15	郡山第三中学校	さくま みわ 佐 久 間 美 和
16	郡山第四中学校	ななうみ せれあ 七 海 聖 恋 亜
17	郡山第五中学校	かんけ ことば 菅 家 琴 芭
18	郡山第六中学校	ななうみ やまと 七 海 弥 麻 人
19	郡山第七中学校	かわしま りこ 川 島 璃 子
20	緑ヶ丘中学校	はらだ はると 原 田 陽 仁
21	富田中学校	さとう ゆきの 佐 藤 雪 乃
22	大槻中学校	こんの あきと 紺 野 煌 斗
23	小原田中学校	かげやま りお 景 山 里 桜
24	宮城中学校	くまだ なみ 熊 田 菜 々 美
25	御館中学校	たきた りの 滝 田 梨 乃
26	郡山ザベリオ 学園中学校	きむら みゆ 木 村 美 結
27	西田学園	いし井 しゅう 石 井 勝
28	湖南小中学校	ましこ かのん 増 子 佳 穂

「2023 ナガサキへのメッセージ」研修行程

8月7日(月)

5:20集合 郡山市役所
 5:30 出発式
 5:40 バス
 9:40 羽田空港
 10:55 飛行機 ANA663 ※機内にて昼食(弁当)
 12:50 長崎空港
 13:30 バス
 14:30 如己堂・永井隆記念館
 15:00 バス
 15:05 城山小学校
 15:40 バス
 15:55 山王神社(車窓)
 16:15 眼鏡橋
 17:00 大浦天主堂・グラバー園
 17:45 バス
 18:15 宿舎・夕食
 バス
 21:00 スロープカー 稲佐山展望台
 バス
 22:00 宿舎
 23:00 就寝

8月8日(火)

6:30 起床
 7:10 朝食
 8:30 宿舎
 バス
 9:00 長崎平和公園・爆心地公園・原爆資料館(市長メッセージ伝達)
 11:40
 12:00
 12:10 昼食(和泉屋平和公園前店)
 13:20 青少年ピースフォーラム(平和会館)
 13:45
 17:30 バス
 18:00 青少年ピースフォーラム交流会(長崎新聞文化ホール) ※軽食
 19:30 バス
 19:45 夕食・ミーティング
 20:30
 21:00
 22:30 就寝

8月9日(水)

7:00 起床
 8:00 朝食
 10:50 平和祈念式典視聴
 11:50
 12:30 昼食
 14:00 平和学習
 15:30 報告会準備
 17:30
 19:00 夕食
 22:00 就寝

8月10日(木)

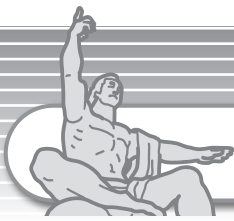
7:00 起床
 7:30 朝食
 8:50 宿舎
 バス
 12:00 福岡空港見学・昼食
 15:35 飛行機 ANA258
 17:30 羽田空港
 18:15 バス ※軽食
 23:15 郡山市役所
 23:20 到着式
 23:30

※ 台風6号の影響により平和祈念式典への参列は中止。
 その他行程・時刻等一部変更。

§ 研修風景 §



「平和祈念像」にて



写真で綴る長崎派遣研修風景 ①



①7月27日に市役所で結団式を行いました。長崎での研修に向け、団員が気持ちを一つにしました。



②8月7日朝、市役所で出発式を行いました。団員代表の大内さんが研修に向けての抱負を発表しました。



③長崎に到着し、如己堂・永井隆記念館を見学しました。自らも被爆しながら平和を願い続けた博士の生涯に感銘を受けました。



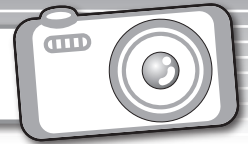
④爆心地から約500mの距離にあった旧城山国民学校では、爆風による爪痕の残る校舎で資料を見学し、原爆の被害の大きさを知りました。



⑤城山小学校の現在の校舎の前に設置された少年平和像は、原爆ですべてを失った城山小の児童が立ち上がる姿を表しています。



⑥国の重要文化財に指定されている現存最古のアーチ型石橋の一つである眼鏡橋を見学しました。



⑦世界遺産にも登録された大浦天主堂を見学し、長崎の歴史と文化に触れました。



⑧国指定重要文化財にも指定されている住宅が集まったグラバー園を見学しました。



⑨日没後は世界新三大夜景にも選ばれた稲佐山展望台から長崎の街を眺め、被災から復興までの道を感じました。



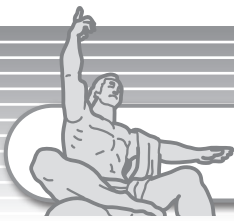
⑩2日目、平和公園。原爆犠牲者の慰霊と世界の恒久平和を祈念して建てられた平和祈念像の迫力に圧倒されました。



⑪市民の皆さんから託された千羽鶴を団員代表の七海さんが奉納しました。



⑫平和祈念式典では、平和公園内にある「平和の鐘」が二度と原子爆弾が使用されないようにとの思いを込めて鳴らされます。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ②



⑬平和公園内にある平和の泉では、平和祈念式典の儀式において水を求めながら亡くなった犠牲者に捧げられる水をくむ瞬間に立ち会うことができました。



⑭爆心地公園内の原子爆弾落下中心地で、原子爆弾で犠牲になられた方々の冥福を祈り、黙とうを捧げました。



⑮爆心地公園にある被爆当時の地層。破壊された家の瓦や溶けたガラスなどが大量に埋没しており、当時の悲惨な様子を実感しました。



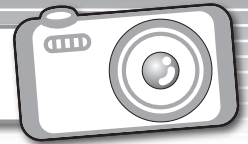
⑯原爆資料館を見学しました。1945年8月9日11時2分で止まった時計は、原爆が投下された時の恐ろしさを訴えています。



⑰甚大な被害をもたらした長崎原爆「ファットマン」の原寸大模型です。その小ささに驚きました。



⑱品川市長から長崎市長への「平和へのメッセージ」を、派遣団の代表が原爆資料館館長に届けました。



⑱ 青少年ピースフォーラムに出席。被爆体験講話では、築城昭平さんの貴重な体験をお聴きし、原爆の無差別性、非人道性を知りました。



⑳ 青少年ピースボランティアの高校生や大学生と一緒に戦争によって失われるものについて考え、戦争はすべてを奪っていくことを知りました。



㉑ 青少年ピースボランティアに案内され向かった平和祈念館の追悼空間には、普段、原爆死没者名簿が納められています。



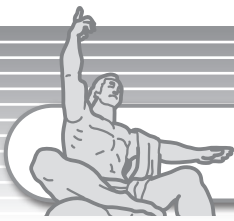
㉒ 青少年ピースフォーラム後に行われた交流会では、平和を学ぶためにやってきた、たくさんの中高生と交流しました。



㉓ 8月9日。台風6号の影響で、平和祈念式典は屋内で規模を縮小して行われました。班員たちは視聴という形で参加しました。



㉔ 3日目の午後は、吉田先生・今泉先生と一緒に班ごとに平和学習を行い、ケンカ・戦争の原因と解決策について話し合いました。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ③



⑳3日目のミーティング。鏑木団長から青少年ピースフォーラムの修了証書が一人ひとりに渡されました。



㉔4日目は福岡空港から帰路につきました。到着式では、団員代表の佐久間さんが今後に向けての決意を述べました。



㉔1班団員（左から）滝田梨乃（班長）、柴原ひまり、七海聖恋亜、安齊凜成、藤田浩輔、景山里桜、佐久間美和（敬称略）



㉔2班団員（左から）石井勝、山口雄奨（班長）、原田陽仁、川島璃子、加藤優奈、鈴木新菜、安藤一伽（敬称略）

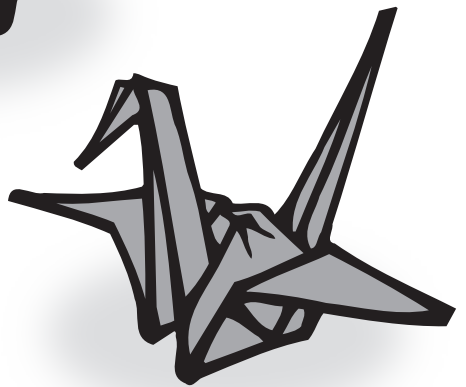
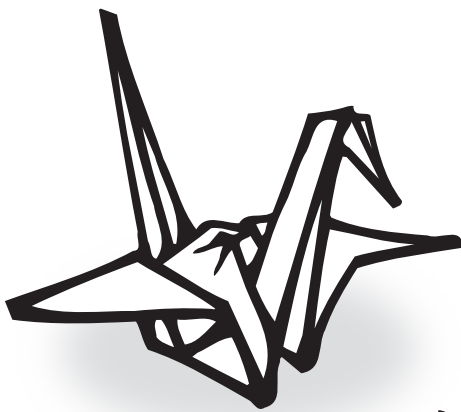


㉔3班団員（左から）菅家琴芭、古川美玖、木村美結、熊田菜々美、七海弥麻人、石井皇誠、古川隼也（班長）（敬称略）



㉔4班団員（左から）折内心優、伊藤涼世、増子佳穂、佐藤雪乃（班長）、紺野煌斗、十林權、大内陽（敬称略）

§ 團 員 報 告 §



たった一発の爆弾で



郡山市立日和田中学校2年 安 齊 凜 成

1 派遣研修への参加に当たって

私が今回の長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは大きく二つある。一つ目は、社会科の歴史の授業で長崎の原子爆弾のことや多くの人の命が原子爆弾によって奪われたことを学んだからだ。二つ目は、私の父方の祖父が戦争体験者であり、その体験談を聴き、戦争の過酷さがどれほどのものなのか関心をもったからである。私は、原子爆弾の悲惨さを現存する建物から実際に学ぶことができると知り、平和の大切さや意味を理解したいと思い、この長崎派遣事業に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

長崎原爆資料館には、原子爆弾の脅威やもたらした被害などの資料が展示されていた。原子爆弾の投下によって、長崎市の約3分の1に当たる地域が焼き払われた。長崎市に住んでいた人の約半分が死傷し、幼い子から老人まで何の罪もない市民が被爆した。そのうちの65%が老人や子ども、女性であった。また、爆心地の近くで見つかった米は、炭のように真っ黒いものに変化し、ガラスの瓶は溶けていた。爆心地から800m離れていた民家にあった時計は爆風で壊れ、時計の針は、原子爆弾が爆発した時刻を指していた。爆心地から約4.4km離れた壁には、監視兵の影が焼き付けられていた。改めて私は、原子爆弾の恐ろしさを痛感した。この78年前におきた事実を、原爆資料館で実際に目の当たりにし、もう二度とこんな悲劇を繰り返してはいけないという想いが今まで以上に強くなった。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは平和会館で行われた。本来であれば2日間あったが台風の影響により1日だけとなった。ここでは、被爆体験講話と「こじんまりフィールドワーク」を行った。

被爆体験講話では、実際にその当時被爆した方から、長崎に原子爆弾が投下された当時の様子を伺えた。当時は戦争で何もかも失い、苦しんだという悲惨な状況を聴き、大変貴重な講話だった。

こじんまりフィールドワークでは、長崎原爆資料館の展示の説明を一つずつ丁寧に聞きながらまわった。また、急に爆弾を投下されたときの対処の仕方や原子爆弾による被害についても事細かく教えていただき、色々なことを知ることができた。

(3) 城山小学校

城山小学校は爆心地の最も近くにあった学校であり、距離はたった500m程しか離れていない学校だ。当時3階建てだったが、学校内部はコンクリート造りにもかかわらず、壁や天井が溶けていた。また、2階と3階はほとんど全焼し破壊されていた。原子爆弾投下時はこの学校の教職員31人中28人が、約1,500人いた生徒のうち約1,400人が亡くなった。3人だけ生き残った教職員で力を合わせ、どのようなことが起きたのかというのを伝えるために、平和祈念館が造られた。実際に見学した時、学校内部には、校舎が破壊された写真や熱で黒く焦げた木・煉瓦があり、戦争の恐ろしさを感じた。もう二度とこのような人類史上最悪な過ちを起こしてはならないと強く思った。



＜ 平和祈念像 ＞

3 心に残ったこと

一番心に残ったのは平和公園にある大きな祈念像だ。この像には、「戦争をなくそう」という、長崎市民の平和への願いや可能性が込められている。

像のポーズにも意味があり、右手は原子爆弾の恐ろしさを、左手は平和、横にした足は原子爆弾投下後の静けさ、立てた足は救った命を表し、閉じた目は犠牲者の冥福を祈るなど一つひとつに意味がある。

この平和祈念像は人々の想いが詰まっているからこそ偉大な像なのだと思う。この像を見ていると、原子爆弾により亡くなられた方々の苦しみや悲しみが、自分の心へドンと重くのしかかったような感覚になった。たった一発でもその一発の原子爆弾により家族や全てを失った人々がいると思うと心が痛む。平和祈念像がある限り、長崎や世界に対する平和への願いが続いていこう。この像は、戦争で亡くなった方々も、生きていたのだということの証であり、この悲惨な戦争が忘れられないようにするために、長崎市民にとって大事なものだと思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣研修に行くまでは、核兵器の恐ろしさや戦争の悲惨さについて教科書の内容や祖父の体験談でしか分からなかったが、今回の長崎派遣事業を通して「平和」に対する考えを変えることができた。

長崎の町は復興されてはいたが、78年前に戦争で被爆した方々の心や体の傷は未だに癒えていない。また、今もなお現実で起きているウクライナ侵攻や頻発する北朝鮮からのミサイルなど、今まで大丈夫だと思っていたことが身の回りで起きるようになり、今後、核兵器が使われることもほど遠くないのかもしれない。

しかし、永井隆先生はこのような言葉を残した。

「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけだ！」

全くその言葉の通りで、戦争は破滅と悲しみしか生まない。今ある平和な暮らしは当たり前ではなく、いつ何が起きるのか分からず、これまでの過ちをまた繰り返すかもしれない。だからこそ、今ある平和を未来へ残していきたいと思った。

平和への話し合い



郡山市立行健中学校2年 安藤 一伽

1 派遣研修への参加に当たって

私は小学校の歴史の授業で原子爆弾によって廃墟となった広島の写真を見た。その写真を見た時はただ恐ろしいと感じただけで、原子爆弾についてはよく知らなかった。今回、長崎派遣事業への参加が出来ると聞いた時、印象深かったあの写真が思い出されたのと同時に、原子爆弾について知りたいと思った。写真を見てただ感じるだけでなく、実際にその場所に行って原子爆弾によって起きた出来事を勉強し、自分自身のために、そして福島県の人々に伝えたいと思い研修に参加しようと決心した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆は放射線の研究や診察を専門としていた医学博士だった。長崎原爆で自らも被爆し、重傷を負いながらも被災者の救護活動にあたった。そんな永井博士についての資料が沢山展示されていた記念館だった。その中で特に印象に残ったものは永井博士が書いた本だ。白血病に倒れ、病に伏しながらも如己堂という住居で17冊の著書を残した。記念館では本の中に書かれている永井博士の思いを分かりやすく展示していた。中でも心に刺さった文は「一人が一人を殺すことは大罪と知っていながら、集団と集団が大量に殺しあう戦争が正義とされているのはなぜだろうか？」というものだ。これは「亡びぬものを」という本の一部で、本当にその通りだと感じた。平和、正義を持っていたとしても殺し合いには変わらないと思った。また平和、正義のためと認識している集団同士が戦争をしていたと思うと胸が苦しくなった。この文以外にも展示してあり、目を通すたびに悲痛と共感

を覚えた。永井博士は病床に倒れても、多くの本を書いて戦争の恐ろしさ、いのちの大切さや世界の平和を訴え続けた。そんな人がいたからこそ今の平和に繋がっているのだと思った。

(2) 原爆資料館

原爆により被害を受けた被爆者の写真を見た時、こんなことがあり得るのかと衝撃を受けた。顔の右側一面に熱傷を受けた被爆者の写真は、どの部分が目や鼻なのか分からない。それほど黒く焼けていた。黒焦げのご遺体の傍らに呆然と立ちすくむ少女の写真もあった。そのご遺体は人の原型をとどめていなかった。そんな写真がたくさんあったけれど、展示されている写真以外にも被害を受け黒焦げとなった人は大勢いたのだろう。家族や友達、誰かに会えたとしても判別が難しく通り過ぎていたかもしれない。そんなことあんまりではないか。黒焦げの写真は二度と会えなくなってしまった人々の辛さ、原爆の恐ろしさをより深く教えてくれた。このようなことが絶対起きてはいけないことも。

(3) 被爆体験講話

被爆当時18歳だった築城昭平さんという方の講話を受けた。私たちに分かりやすく、そして深く知ってもらうために、町の被害の写真をスクリーンに写しながら体験したことを話して下さった。昭平さんから出る言葉はどれも辛く痛い言葉ばかりだった。「防空壕に行くとケガをしている人がいっぱいいて入れなかった。」と聞いた時、私は絶望的だと思った。それでも生きようと歩き続けた昭平さんは心の強い方だと思った。昭平さんは「核を作る前の世界に戻そうじゃないか」と強く主張していた。



< 私達の平和宣言 >

3 心に残ったこと

ただ学ぶだけでなく、人との意見交換や伝えることが大切だと思った。この写真は一緒に見て学んだ仲間と考えた平和宣言。なぜケンカや戦争が起ってしまうのかについて話し合った。私と考えが同じような人がいたり、違った意見があって「確かに」と互いに思うことがあった。その話し合いからケンカや戦争を起こさないためにはどうしたらいいかを一つの紙に貼り出した。それからみんなで絵を描いたり折り紙で鶴を折ったりして「My 平和宣言」を作った。出来た「My 平和宣言」を見たとき、これから私たちが平和を永く持続していかなければと思った。

一緒に参加した郡山市内の中学生 28 人との交流会は日頃あまりできない体験だったので、意欲的に取り組むことができ、充実したものになった。今回の派遣研修のように人と人のコミュニケーションや話し合いによって人の考えを尊重したり、自分の意見を話したりすることによって分かり合う事が出来たならば平和持続への一歩となるのではないかと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、派遣研修でとても貴重な体験をしたと思う。新たな友達と学んだこと、長崎の食文化に触れられたこと、そして原爆について詳しく知ることができた事は自分自身の成長と思い出になった。「長崎を最後の被爆地に」「11 時 02 分」という言葉が忘れられない。もう二度と核を落とさせない強い主張、11 時 02 分というあの悲劇が始まった時刻が自分の中でずっと残っている。また、被爆した建物、被爆者の方の講話や写真を見て核の恐ろしさを思い知らされた。それがあってこそ今の生活のありがたみ、平和の尊さについて思うことができた。

私はこの体験を通して未来に平和の尊さと核の恐ろしさを伝えたい。今まで辛い思いをしてここまで平和を繋いできてくれた人々のために、そしてこれからの人々のために、少しでも自分で行動していこうと思う。平和のバトンを繋ぐには、学び、よく考え行動に移すことが大事だと強く感じた。

忘れてはならない記憶



郡山市立明健中学校2年 折内 心 優

1 派遣研修への参加に当たって

私が、今回、長崎派遣事業に参加しようと思ったのは、5月に仙台空襲の資料館に行ったことがきっかけだ。そこで私はあまりの悲惨さに絶句した。だが、もう見たくないとは思わず、もっとこの時代のことが知りたいと思った。

長崎市に投下された原子爆弾の模擬原爆は福島県にも落とされたそうで、そのことが分かり、知らなければならないと思ったのもきっかけのひとつだ。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

ここでは、原爆投下後の日本の姿や悲惨さを伝える為の物が展示されていた。中に入ってすぐ原爆投下時刻である11時02分を刻んだまま動かなくなった時計があり、言葉を失った。

奥に進んでいくと、当時の写真やファットマンの構造が詳しく説明されており、それらを見て涙があふれそうになった。だが、これらの物や写真は、私達のような戦争を知らない世代に少しでも知ってほしいと残されているのを感じ、目をそらさないように一つ一つに目を向けながら見学した。平和について改めて考えていきたいと強く思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

ここでは、最初に被爆者の方の被爆体験を聴いた。どれだけ想像しても分からなかった当時の気持ちや別世界のように変わり果てた町について、被爆者の方が話してくださり、とても貴重な話を聞くことができた。原子爆弾について知らなかったことや、爆風の影響、感染症のことについてなど、資料館を見ただけでは分からない当時の状況を詳しく知ることができた。

体験講話をされた方は、忘れてはいけないし、忘れてほしくないという想いで話されていると知って、言葉だけでは表せない強い想いを感じることができた。

次に、印象に残ったのは戦争の疑似体験だ。紙に、自分にとって大切な人、もの、場所を書いて、時系列で起こったことに関連するものを書いたらその紙を捨てるというような体験をした。手から離れていく感触がとてつらく、原爆が落とされたとき、このような思いをした人がいるのを知って、とても悲しくなった。だからこのような思いをしないためにも核兵器はなくさなければならないと思った。

(3) 城山小学校

この小学校は爆心地からおよそ500mの場所に位置する小学校だ。当時は1,500人の児童が通っていたが、原爆投下により1,400人の児童が亡くなったとされている。

鉄筋コンクリート3階建てだったが、原爆により2・3階は全焼。今はその旧校舎に、亡くなられた児童や教師たちの遺品が展示されている。嘉代子桜や江頭桜、荒川平和桜など、学校で亡くなられた方のご遺族が寄贈した桜が数多く植えられており、平和を願うモニュメントも置かれている。

このような場所に入り、とても胸が締め付けられた。校舎には、熱線など原爆による被害の痕跡も残されており、とても悲惨さが伝わってきた。



＜水を求めた人達が沢山亡くなった川＞

3 心に残ったこと

この写真は、原子爆弾落下中心地碑の近くにある川の写真だ。一見ただの川のように見えるが、78年前には火傷をした人達が水を求めて向かい、たくさんの方が手遅れで亡くなってしまった川だ。

このような場所は今ではもうないと思っていたが、自分の目の前にある川がそうだと知って、ショックを受けたとともに信じられないと思った。なぜなら、とてもきれいな川になっていたからだ。このような場所で多くの方が亡くなったなんて想像もできなかった。今では普通のようにきれいな水が流れていて、それが当たり前と思うことがある。だが、それがどんなに幸せなことなのか理解ができた。些細なことでも感謝しながら生きていきたいと強く思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

研修に行く前は、平和とはどんな時のことを言うのかよく分からなかった。しかし、まだ確信とまでは言えないが、研修を終えてみて、平和とは、罪のない命が消えない、誰もが笑顔でいられて、怯える必要がない状態のことだと思うようになった。

今の長崎と原爆を落とされた時の長崎を比べると、見違えるほど復興していて、平和になったのだと感じる。ここまで来るのにどれだけ大変だったのかは分からない。だが、ここまで復興できたのは、残された人たちが一体となって協力し合い、現実逃避せずに事実を伝えていこうと努力したからだと思う。私も、今回長崎で学んだことを忘れずに、一人でも多くの人に伝えていきたい。

私たちだからこそできること



郡山市立安積中学校2年 古川 隼也

1 派遣研修への参加に当たって

2022年2月24日。ロシアのウクライナ侵行が始まった日だ。それまで私は、世界情勢が大きく動くような戦争について、教科書で読んだだけの漠然とした知識しかなかった。連日、現地での悲惨な状況が報道され、今までの平和が当たり前ではなかったことを痛感した。

ロシアによって核兵器使用が脅かされている今、私は、日本で起きた戦争について知りたいと思った。そんな時、長崎派遣の話を聞き、自分の目で見て学び、肌で感じることをできるとても良い機会だと思い、今回の長崎派遣に参加することを決めた。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井先生は、戦前から、長崎医科大学で放射能の研究をしており、白血病を患っていた。そして、8月9日の午前11時2分、原爆により妻を亡くし、自身も被爆した。被爆後は、疎開していたため難を逃れた2人の子どもと共に生活しながらキリスト教の教えに基づき、被爆者の救護や放射能の研究を続けた。その後、「長崎の鐘」に代表される数々の本を書き、原爆の悲惨さを訴えた。永井先生の著書には、平和を願った多くの言葉が綴られていた。そんな言葉の中に、「笑いを失ったものは不幸だと呼ばれてる。泣かぬことのできぬ子は、さらに不幸である」という言葉がある。この言葉にある「泣かぬことのできぬ子」とは、戦時中の子どもたちのことを表している。このことから、戦時中それまで不幸だと言われていたことよりも辛かったのだと分かる。

(2) 原爆資料館

原爆資料館には、被爆後の写真や、被害の惨状、原爆によって亡くなってしまった人たちの遺品などが生々しく展示されていた。そのような展示物を見たとき、私は、真っ先に「許せない」という怒りの感情が湧いてきた。亡くなってしまった人たちの中には、私より小さな子や、私と同じくらいの年の子もいた。当時の人たちの平均寿命は30歳～40歳くらいとされているが、幼くして亡くなってしまった人たちは、それからの人生が理不尽に奪われたことになる。しかし、さらに資料を読んでいくと、次第に「恐ろしい」と感じるようになった。私たちの身近にあるものが、変わり果てた姿になっていたからである。多くの資料や写真を見て、核兵器や戦争の恐ろしさ、戦争では、何も解決しない事を学んだ。

(3) 平和祈念式典

8月9日。平和祈念式典が行われた。私たちは、台風の影響で、ホテルで待機しながら、テレビを通して参加した。午前11時2分。長崎の鐘が鳴り響く中、黙とうをした。私は、黙とうをしている間、「核兵器がこの世の中から無くなりますように。原爆によって亡くなった方々の死が決して無駄になりませんように。」と願い続けた。式典中のスピーチには、「核兵器のない世界」という言葉や、「長崎を最後の被爆地に」という人々の願いが幾度となく出てきた。被爆者のスピーチを聞いていると、核兵器保有国に対して、何があっても核兵器を使わないでほしいと思った。



< 城山小学校 >

3 心に残ったこと

いつも何気ない気持ちで通い、いつもと同じように勉強し、友達と話し、部活に励む。そんな場所である学校が、なんの前触れもなく滅茶苦茶にされてしまったら、どれだけの人が悲嘆に暮れるだろうか。

城山小学校は、爆心地からわずか 500 メートルの場所に位置している、爆心地から最も近くにあった小学校だ。写真の城山小学校は、コンクリートが剥き出しになり、焼け焦げているが、被爆前の城山小学校は、白く、美しく塗装されていた。しかし、原爆によって塗料は焼け落ち、2・3階は全焼してしまったのだ。被爆時、城山小学校には、職員やその子どもなど、31名の教職員関係者がいたが、そのうち、28名が亡くなった。さらに、隣接していた校舎には、三菱兵器製作所の人たちが疎開していたため、被爆時に、約 120 名が出勤していたが、そのうち、107 名が亡くなった。城山小学校は、被爆した瞬間に変わり果ててしまい、被爆時に学校にいた多くの人たちは亡くなったのだ。自分の身近にある学校すら、一瞬で奪われてしまうということに、改めて強い恐怖を覚えた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣に参加して、戦争や核兵器は、自分たちの過ごしてきた日常を奪ってしまう恐ろしいものだと学んだ。今の日本は、戦争を経験した世代が、年々減少している。特に、戦地の悲惨な状況を知る人は少なくなっているため、その恐ろしさが記憶から風化されてしまう恐れがある。そこで、戦争や核兵器の恐ろしさを肌で感じてきた私たちだが、戦争を知らない人たちに、その恐ろしさを伝えていく必要がある。戦争や核兵器について知って、「大変だったんだな。恐ろしかったな。」と感じて終わるのではなく、周りの人へ肌で感じたことを正しく伝えていく事が大切だと感じた。自分のできる範囲だけでも、長崎派遣に行って学んだことを伝えていき、少しでも多くの人たちに、戦争や核兵器は、日常を壊してしまう恐ろしいものだとして理解してもらいたい。

今の平和な日常がこれからもずっと続いていくためにも。

もう二度と被爆者をつくらない



郡山市立安積第二中学校 2年 柴原 ひまり

1 派遣研修への参加に当たって

「平和」とは何だろうか。いつも、平和が当たり前の日常で過ごしている私たちにとって、戦争とは遠い存在だ。小さな喧嘩が起きても犠牲者は出ず、謝れば解決するのがほとんどだ。でも、戦争になると犠牲者が出てしまうのはなぜだろうか。戦争の時代には、平和が存在しておらず、自由がなかった。

長崎は、戦争中に核兵器による攻撃を受けた。私は、長崎が訴えている「平和」とは何か、自分の目で見て学びたいと思い長崎派遣事業への参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 城山小学校

城山小学校（城山国民学校）は、爆心地から西方 500 メートルの場所にあり、最も爆心地から近い国民学校だった。当時、学校にいた教職員 31 人のうち 28 人が、およそ 1,500 人の児童のうち 1,400 人余りが家庭で、尊い命を失ってしまった。このほか、三菱重工業株式会社長崎兵器製作所の一部が疎開して学校を使用していたため、その所員や動員学徒等の約 120 人中 100 人余りの方が亡くなった。

被爆校舎には、数多くの貴重な展示物が展示されており、被爆当時を感じさせるようだった。私はその中でも、一本のカラスザンショウの木がとても印象に残っている。被爆しながらも辛うじて生き残り、必死に水を吸って生きた生命力に心打たれた。

姿や形がどうであれ、生き延びようとする力には、平和を訴えたいという想いがあったのではないだろうか。

(2) 平和祈念式典

私は、平和祈念式典に参列している人がどのような気持ちで参列しているのか、今まで自身には関わりがないと思っていた。

今回の平和祈念式典は、台風の影響により規模縮小での開催となった。テレビの画面越しで、市長や被爆者が平和を訴えていた。原爆投下の 11 時 2 分になり、黙祷をささげた。長崎は、静寂に包まれ平和の鐘だけが鳴り響いていた。私はその時に「平和を心から願っている人が一人でも多くなることで、もう二度と被爆者をつくることなくはないか」と心から想った。

(3) 被爆体験講話

8 日に行われた青少年ピースフォーラムでは、18 歳で被爆した築城昭平さんからのとても貴重な講話があった。全身にヤケドを負い、特に左腕と左足は重傷だった。左手にはまだ、「ケロイド」というヤケドの跡がまだ残っている。現在 96 歳でありながらも、この体験を伝えている。なぜ、このお話をしているのか尋ねられると「被爆者が減少している今、何とかして話をしないと平和は消えてしまう。だから、何とかして伝えようと被爆者同士で話し合った。」と語った。被爆者が思い出すのも辛い自らの被爆体験を語ることで、平和は今も続いているのだ。この平和を語り継いでいくのは、平和な時代に生きる私たちの使命であると強く思った。



< 平和の泉と少女の手記 >

3 心に残ったこと

私がこの研修で一番心に残ったのは、写真にある平和の泉である。原爆のため体内まで焼けただけた被爆者たちは「水を、水を」とうめき叫びながら亡くなっていった。平和の泉は、その痛ましい霊に水を捧げて冥福を祈り、世界恒久平和と核兵器廃絶の願いを込めて浄財を募り、建設された。円形の泉の奥には平和祈念像が見える。平和の泉の正面の石に刻まれている言葉は、被爆当時9歳だった山口幸子さんの手記に書かれていた「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが 一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」である。この少女は、生きるために「あぶらの浮いたままの水」を飲んだのだ。きれいな水を求めている暇などない。今飲まなければ死んでしまう。

もし、この選択肢を選ぶのならどちらを選ぶだろうか。生死をさまよっているとき私だったら、不安や恐怖でこの水を飲むかもしれない。今、平和な時代に生きていることに感謝しなければならぬ。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は今回の長崎派遣事業を通して、長崎が訴えている「平和」についての理解を一步進めることができた。被爆者の平均年齢が85歳を迎えた今、私たち一人ひとりに何ができるのか。唯一の戦争被爆国である日本の被爆地に実際に行くことも大切だが、被爆した人の話を聞き、それを語り伝えることも大切である。それが長崎に行った私たちの義務だ。もう二度と被爆者をつくらぬために平和な時代に生きる私たちの「平和のバトン」を未来に繋いでいきたい。

この4日間で、多くのことを学んだ「ナガサキ」。そして、研修を共にした仲間、支えてくれた人々、この研修に行くことができる時代に生まれたこと、全てが平和なことでありとても幸せなことである。

本当の安全と平和は、地球から核兵器をなくすことなのである。

これから先の人生を…



郡山市立三穂田中学校 2年 鈴木 新菜

1 派遣研修への参加に当たって

私は今、平和な暮らしを送っている。食べものがあり、友達がいて、帰る場所があり、何不自由なく、これが私にとっては当たり前の生活。派遣研修に参加する前までは「戦争」という言葉にあまり馴染みがなく、戦争について知識もなく、戦争は「とてもひどいもので、二度とあってはならない」こととしか思っていなかった。

2月24日、ロシアとウクライナの本格的な戦争がはじまり、私はニュースでその様子を見て驚いた。建物は破壊され、家族や友人などを失い、泣き悲しむ人々の姿、これが戦争、昔の日本で起こった戦争なのか。私は78年前のあの夏の日を二度と繰り返さないために、この長崎派遣へ参加しようと決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館は、被爆当時の写真や貴重な資料が多くあり、11時2分で時計が止まっている時計があった。その時刻に、原子爆弾で多くの尊い命が一瞬で失われてしまったのだ。私がその中で最も印象に残ったのが、被爆当時の写真である。写真を見ていると心がだんだん暗闇の中に引き込まれていくような感覚で胸が苦しくなった。建物、そして木や草すらない、一面が瓦礫、ところどころに原爆で亡くなってしまった人の遺体の写真や皮膚が焼けただれてしまった人の写真など、どれも痛ましい写真だった。被爆した人のほとんどが即死、奇跡的に生き残った人でも放射線による苦しみ、いろいろな病気になり亡くなってしまった人もいた。この話を聞き、被爆者の人たちを思い、今生きていることは、本当に奇跡的なことなんだなと思っ

た。そして改めて核兵器の恐ろしさと力を痛感した。核兵器の熱風で溶けてしまった瓶やお弁当。長崎に落とされた核兵器を再現した原子爆弾の模型などもあり、原爆資料館をみて、戦争を二度とおこしてはいけないと強く感じた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、ピースボランティアの人たちが分かりやすく私たちに戦争の怖さを教えてくれた。戦争が怖くて残酷なことは分かっていたが、戦争は怖いどころではなく地獄だと思った。私が一番印象に残ったのが、いま世界にある核兵器の数だ。BB弾を核兵器と見立てて、上から落とした時の音で核兵器の威力や数を教えてくれた。長崎に落ちた核兵器は威力もすごいことと、今この世界には、莫大な数の核兵器があることに改めて驚いた。戦争のない世界、そして平和な生活を送るためにも、まずは一日も早い核兵器の廃絶を願いたい。

(3) 平和祈念式典

台風の影響で、現地に行くことはできなかったが、原爆が投下された同じ地の長崎市内で平和祈念式典を見ることができた。8月9日11時2分の黙祷。私は心の中で平和を願った。78年前の原爆の被害、そしてこれからの平和な世界を願って。平和祈念式典の様子を見て私は、世界中の多くの人々が平和を望んでいるのがとても伝わった。画面越しからでも伝わる緊張感や、平和を訴える姿にとっても感動した。

これから先は、私たちが平和な世界に、そして核兵器のない世界に、戦争のない世界に変えていくことが使命だと強く思った。



＜ファットマン＞

3 心に残ったこと

この派遣研修に参加して私は戦争の恐ろしさを実感した。青少年ピースフォーラムで戦争の疑似体験をして、戦争で全部を失うことがわかった。昔の人たちは戦争によりどれだけの物や人そして思い出を失って悲しんだのか私には分からない。でも戦争をなくしたい、そして核兵器を廃絶したい想いは、時代がかわっても変わらない。だからこそ、戦争のない世界・核兵器のない平和な世界にしたい思いを大切にしていきたい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

初めての長崎県は自然が豊かで、ここに昔、核兵器が落ちたのがびっくりするぐらい美しい景色が広がっていた。派遣研修に参加して私は、戦争の残酷さと原爆の恐ろしさを知った。今なお世界では様々な紛争があり、核を保有している国がある。福島県も戦争の被害とは違うけれど放射能の苦しみを味わった。そして、少しずつ復興してきている。だが放射能の苦しみは、身体の奥深くを傷つけて、時がたっても完全に消えはしない。だからこそ福島をはじめとする日本から、平和を希求するすべての人々と連携しながら「平和」の大切さを世界に発信していきたい。世界でおきている核兵器を使用した戦争を私たちが止めなければならないと、私は思っている。

だが、戦争はそう簡単には止められない。私たちの安全・平和を本当に守るためには、地球上から核兵器をなくすしか方法はないと思う。この研修で得た様々な知識を基に、これから先の私たちに何ができるのかを考え、戦争の記憶が途絶えないように戦争、そして核兵器の恐ろしさを伝えていきたい。平和を願い、78年前のあの夏の日を絶対に忘れないために。

核兵器のない平和な世界へ



郡山市立逢瀬中学校2年 古川美玖

1 派遣研修への参加に当たって

去年の秋、学校の文化祭で、長崎派遣団に参加した先輩の発表を聞く機会があった。長崎で、平和と命の尊さを学んできたという発表内容は、ぬるま湯に浸かるような毎日を過ごしていた私にとって、とても興味を惹かれるものだった。

インターネットが発達した現代社会では、大抵のことが自宅にいながらできてしまう。しかし、実際に目で見て感じたことを、自分の言葉で伝えることに意味があるのではないか。行動するのは今しかないと思い、参加を決断した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

研修前、私は図書館で本を借り、戦争がもたらした被害の大きさや状況を学ぶことにした。しかし、想像以上に悲惨な写真が多く、何度も本を閉じそうになった。その中でも特に、原爆が投下された時刻で止まったままの柱時計の写真が印象に残った。昔の家にありそうな古い時計で、振り子が付いた時計は珍しいと思ったので記憶に残っていた。

資料館で実際の柱時計を目にしたとき、一瞬間の中が真っ白になった。本に載っていたものと目の前の柱時計は同じものだが、伝わってくるものが全然違っていたからだ。何も物言わぬ柱時計は、11時2分を指したまま、原子爆弾のすさまじい威力と恐ろしさを全身で訴えているようだった。この時刻に亡くなった人々のことを考えるだけで胸が痛み、命と平和の尊さを願わずにはいられなかった。

(2) 平和祈念式典

8月9日、平和祈念式典が執り行われた。式典は、長崎平和公園の祈念像前で行われる予定だったが、台風の影響で中止となってしまった。そのため式典は、屋内会場の出島メッセ長崎で、長崎市の関係者のみでの開催となった。私は式典への参列を予定していたが、当日は宿泊先の部屋のテレビで視聴することになった。派遣団で長崎に来た目的の一つが式典への参列だっただけに、とても残念で仕方がなかった。午前11時2分、1分間の黙とうの中で、「核兵器による戦争で、人々の大切な命が二度と奪われることがありませんように」と強く願った。

(3) 青少年ピースフォーラム

被爆体験講話では、築城昭平さんのお話を聴いた。築城さんは当時18歳で、原爆が投下された時は就寝中だったそうだ。目を開けてからの光景や、左腕のやけどを負った場所など、当時のことを詳しくお話ししてくださった。実際にやけどの跡を見せてもらったが、78年経った今でも、築城さんの体には痛々しい原爆の傷跡が消えずに残っていた。築城さんの「戦争を二度と起こしてはいけない」という言葉は、短いながらも重みがあり、決して忘れてはいけないメッセージだと思った。

翌日、班ごとに2つのテーマで意見交換をした。「【ケンカ・戦争】の原因は何だろう？」というテーマでは、違い、言葉、比較についてたくさんの意見が出た。自分と違った意見を聞いて、否定するのではなく、考えを受け止めることで物事の見方が広がったので、とてもいい経験になった。



< 平和祈念像 >

3 心に残ったこと

長崎のシンボルとなっている平和祈念像。天を指さす右手は「原爆の脅威」を、左手は「世界平和」を、軽く閉じたまぶたは「原爆犠牲者への冥福」を意味しているようだ。

私がこの像を初めて知ったのは、小学校の歴史の授業だった。その際は資料集で写真を見ただけだったが、今回派遣事業に参加することにより、改めて学習する機会をもつことができた。調べるうちに、この像には長崎の人々の平和に対する強い思いが込められていると感じ、本やインターネットの情報だけではなく、自分の目で実際に見たい気持ちがより大きくなった。

実際に像の前に立ったときは、言葉にならない感情が込み上げてきた。想像していたよりもずっと大きく、厳かな雰囲気をもっていたが、まぶたを閉じた表情は穏やかに、静かに悲しんでいるようにも見えた。この場所、この空の上で爆弾が破裂し、多くの人の命が一瞬で奪われたのだ。原爆資料館で説明を聞き、たくさんの展示物も目にした。原爆投下は実際の出来事だと頭では分かっているが、やはり信じられない気持ちのほうが大きかった。

平和祈念像からは、長崎の人々の希望や願いが感じられ、まさに平和の象徴だと思った。これまでに幾多の人が見上げ、何を思ったのだろうか。長崎の静かな空の下、見上げた首が少し痛くなるのを感じながら、私は平和の尊さと命の大切さを改めてかみしめた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

日頃、戦争や平和について意識することなく生活していたが、決して他人事ではないことを実感した。この瞬間にも世界には、戦争で傷付き、苦しんでいる人がたくさんいる。テレビやインターネットからは、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースが絶えず報道されているが、どこか遠い国の出来事のように、真剣に考えたことがなかった。

しかし今は違う。住む国は違っても同じ人間同士、争いは悲しみしか生まないのだ。また、戦争とは、国と国の争いだけではない。不満や妬みなど、少しの行き違いから生まれる人間関係のトラブルも、小さな戦争と言えるのかもしれない。相手への思いやりや、ちょっとした想像力をもち合わせていけば、戦争とは無縁の世界になると思う。

また今回、派遣団として他校の中学生と交流する機会ももてたことも、私の中では大いに意義があった。いろいろな考えをもつ人がいて当たり前の世界を、私たちはこれから担っていくのだ。他者の意見に耳を傾け、自分の意見を形作ることがこんなに難しく、楽しいこととは思わなかった。思い切って参加して、本当に良かった。

忘れないためには…



郡山市立片平中学校2年 大内 陽

1 派遣研修への参加に当たって

広島と長崎に原爆が落とされたのは知っていた。しかし、原爆とは何なのか、何故広島や長崎に落とされたのか詳しい事は分かっていたなかった。

戦争は今の時代には起きないだろう。そう思っていた。しかし、ロシアとウクライナとの戦争が起きてしまった。さらにこの戦争への意識が薄れつつある。自分はこの意識が薄れているこの状況を不思議に思った。もし、どちらかの国が核兵器を使ってしまったら…と思うと怖くてたまらないからだ。

この現状を少しでも変えるために、まず、自分が戦争や原爆への理解を深めたいと思い、長崎派遣への参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原爆投下時間の11時2分で止まっている時計、原爆投下前の長崎市の街並みの写真、原爆投下直後の長崎市の写真、熱風により沸騰して固まった瓦など、見ただけで胸が苦しくなるものばかりだった。特に心に残ったのは、「手の骨とガラス」という手と溶けたガラスがくっついたまま亡くなってしまってそのままガラスが固まり手の骨だけが残っているものだ。これを見て僕は原爆の威力の大きさ、悲惨さをとても実感した。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムに戦争の疑似体験という時間があった。まず、最初に「大切なものカード」「大切な人カード」「大切な場所カード」というものを書いた。そして疑似戦争体験が始まった。戦争が始まり、空襲警報が鳴るように

なった。それにより雑貨屋などの自分にとって大切な場所が無くなってしまった。空襲により発電所などの生活に必要な場所、そこで働く人、電力や必要な物が無くなってしまった。さらにお父さんが徴兵に行ってしまう、いなくなってしまう。食事も配給制になり、美味しいものも食べられなくなってしまった。そして、8月9日11時2分原爆が落とされ一緒にいた兄弟がいなくなってしまう。家であったであろう場所から母親の死体も見つかり、ついには自分一人になってしまった。

これは本当の話をもとに作られた話だそうだ。

この体験を通して戦争とはどんなに理不尽で残酷かを体感した。

(3) 被爆者の体験談

ピースフォーラムで築城昭平さんの話を聞くことができた。築城さんは当時18歳で爆心地から1.8km離れた学校の寮で夜勤にそなえ睡眠中に被爆した。全身火傷を負い、特に左腕と左足は重傷だった。隣の建物が崩れて、飛び起きた時に驚いたそうだ。昼なのに真っ暗だったそうだ。外に出てみたら長崎市が更地になっていたそうだ。その時は爆弾が集中的に降ってきたのだと思っていたそうだ。それほどまでに原爆の威力が大きかったということだ。

築城さんはこのような苦しい経験を話そうと思った経緯をこう話している。「20年くらいたってから被爆者が少なくなっていった被爆者同士で話し合いこの経験を忘れないようにと自分が体験したことを話そうと思った。」

この話を聞いて僕は、この話を伝えなければならぬと感じた。



< 多くの人を苦しめた爆弾 >

3 心に残ったこと

1番心に残ったのは写真の原子爆弾「ファットマン」のレプリカである。この原子爆弾の長さは3.25メートル、直径1.52メートル、重さ4.5トンのプルトニウムを使った原子爆弾である。この原爆が爆発した時のエネルギーは、爆風50パーセント、熱線35パーセント、放射能15パーセントの割合になる。熱戦は3,000～4,000度にまで達したそうだ。このレプリカを見て感じたことは「小さい」だ。なぜならこの爆弾たった一発で長崎市内を吹き飛ばし、多くの人々の命を奪い今なお多くの人を苦しませ続けているからだ。何より人を苦しませる爆弾が自分たちと同じ人間が作っている事にとっても複雑な気持ちになった。こんなことはもう二度と起きないでほしいと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕はこの長崎派遣事業で核兵器や戦争がこの世にあってはならないと思った。また、たくさんの方の意見を聞いたり自分の意見を言ったりして自分の考えをもっと深められたと思う。今、日本が平和なのが当たり前ではない事、自分が平和な時代に生まれたことがどれだけ幸せだったのかを知った。

自分が学び、聞き、体験してきたことを郡山の人々に伝えたいと思う。さらに今年で被爆者の平均年齢が85歳になり段々と原爆や戦争を体験した人々の話を聞けなくなっている。話が聞けなくなってしまうのならこの経験が忘れ去られてしまうのではないかと、僕はこれを一番恐れている。忘れ去られないために僕はこの事を伝え続けたいと思う。

原爆被災地から学んだこと



郡山市立喜久田中学校2年 加藤 優奈

1 派遣研修への参加に当たって

「ずっと昔の8月9日、長崎に原子爆弾が落とされた」この研修に参加するまで、私は原爆についてこのことしか知らなかった。「原爆」というと「恐ろしく、悲惨だ」というイメージが強く目を背け、よく知ろうとしてこなかった。そのため、先生からこの研修について聞いたとき、「原爆についてよく知り、平和を考えるチャンスなのではないか」と思い、参加をすることにした。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

1945（昭和20）年8月9日11時2分。長崎に原子爆弾が投下された。それによって被爆し、体が焼けてしまったり、焦げてしまった被爆者の痛々しい姿。11時2分を示したまま止まってしまった時計。長崎型原子爆弾「ファットマン」実物大模型など原爆による被害を物語っている展示物が多くあった。

特に「ファットマン」の実物大模型が印象に残った。一瞬にして何万人もの命を奪ったのだから、とても大きいものだろうと思っていた。しかし、実際は高さ3.25m、直径1.52mと被害からは考えられないほど小さく、驚いた。こんなに恐ろしいものが世界にはまだまだあるのだと思うと、感じたことがないほどの恐怖と心苦しさを感じた。

(2) 永井隆記念館

原子爆弾が投下される前に、永井隆博士は白血病を患い、「余命3年」と診断された。その2か月後に被爆し、重症を負いながらも被爆者の救護に当たった方だ。自分より他の人のために活動した永井博士の生き様に感銘を受けた。

その後寝たきりになっても17冊の本を書き上げ、人々に平和を訴え続けたそうだ。永井博士は生涯にわたって人々に生きる勇気と希望を与えたことだろう。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、被爆体験者の講話やこじんまりフィールドワーク、戦争の疑似体験を通して戦争の悲惨さを感じ、平和について考えた。

特に、戦争の疑似体験が心に残った。突如鳴り響いた空襲警報。緊張感があり、とても恐ろしかった。「この警報が日常に溶け込むようなことは絶対にあってはならない」と強く感じた。そして、自分の大切なものをいくつかカードに書いた。戦争が進むにつれ大切なものはなくなっていく、最後には全てなくなってしまった。私が実際にその状況になったら、生きる希望を失い「生きる意味なんてない」そう思うてしまうだろう。本当は明るいはずだった人々の未来を粉々にした戦争は二度と起こしてはならない。そのためには、一人ひとりが平和についてよく考える必要があると思った。



< 溶けた瓶 >

3 心に残ったこと

3,000度～4,000度。これはどのくらいの熱さなのだろうか。現在の日本の最高気温は、41.1度。最近では35度以上の猛暑日もよくあることだ。しかし、原爆による熱線は3,000度～4,000度。想像するにもできない温度だ。そんな熱線が人々を襲った。一瞬にして人々を物を町を焼いてしまったのである。「やけど」そんな言葉では済まないほどに肌が焼け、肉が見えてしまった方。黒く焦げ、骨のみが残った方。ぺちゃんこにつぶれた瓶。食事が入ったままの弁当箱。「この先70年は草木も生えない」と言われた町。熱線による被害が私の心を強く締め付けた。人々の生活を変えてしまった熱線。これから先、浴びる人がいないことを願う。そして、原爆から78年。長崎の町を元の姿へと戻してきた人々の復興への強い想いとその努力に感動した。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣事業を通して戦争の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶことができた。この研修中、これまで感じたことがないほど恐怖や苦しさを感じ、心が痛んだ。これは、長崎の地で感じる事ができた「一生の財産」だと私は思う。しかし、長崎に行き学ぶことは、そう簡単にはできない。とても貴重な経験になったと思う。だからこそ、私には周りの人に戦争の悲惨さを伝え、平和への想いを広げていく使命があると感じた。今も世界中で起きている戦争。世界中に残された12,520発の核兵器。これらが実際に使われる未来を私は見たくない。一人ひとりの平和への想いが広がり、平和への大きな輪になることを願っている。「長崎」を最後の被爆地にするために、私ができること、しなくてはならぬことを考えて生きていきたい。「平和な生活は、普通ではない。とても幸せなことだ。」ということ強く感じさせられた4日間となった。

平和について



郡山市立熱海中学校2年 藤田浩輔

1 派遣研修への参加に当たって

広島と長崎。この二つの県に原爆が落とされたことは知っていた。しかし僕は広島の印象が強く、長崎のことはあまり意識することはなかった。そこに「長崎派遣研修」の呼びかけがあった。先ほど述べたように、僕は長崎のことをほとんど知らなかった。長崎はどういったところなのか、なぜ原爆が落とされたのか、疑問がどんどん出てきてそれが知りたくて、長崎派遣研修に参加した。不安もたくさんあったが、「一つでも多く長崎のことについて知ろう。」と、思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは8月8日に、日本全国から集まった小中高生と共に行われた。まずは被爆者の方から、貴重な話を聞かせていただいた。やはり実際に被爆した方の言葉は、どんな資料よりも説得力があり、僕の心に突きささった。次にこぢんまりフィールドワークを行った。ボランティアの方々にいろんな所を案内していただき、建っている像に込められた意味や、被爆者の言葉を、知ることができた。最後の交流会では、みんなと話したり、他校の人と交流したりして、とても楽しかった。台風の影響で2日目が中止になったのは残念だったが、とてもいい1日となった。

(2) 永井隆記念館

この永井隆記念館では、永井隆さんが残した言葉などが展示されており、どの言葉も平和を願い、我々の心に残るものばかりだった。中でも印象が強かったのは、「あの活気にあふれていた町を大火葬場にし、一面の墓原にしたのはだれだ？…私達だ。「剣をとるものは剣にて滅ぶ。」との戒めを冷ややかに聞き流し、せっせと軍艦を作り、魚雷を作っていた私たち市民なのだ。」という言葉だ。納得だった。誰も剣を取らなければ、誰にも剣を向けない。「争いが起こったら止める。」ではなく、「争いを起こさない。」ということが大切だと、教えられた。



＜ 溶けたお金と万年筆 ＞

3 心に残ったこと

僕は、長崎派遣研修に参加し、原爆の恐ろしさを身にしみて感じた。上の写真を見てほしい。これは溶けたお金と万年筆の写真である。ボロボロになっているが、これは昔のものを掘り出したわけでもなく、実験に使ったものでもない。一つの原因が落とされたとき、一瞬にして溶けたものなのである。お金は金属で出来ている。金属を溶かすには、相当な温度の熱が必要となるはずだ。そんな金属が、一瞬にして溶けたのだ。建物や人への被害が小さいわけがない。実際にこの一つの原因で何万人もの人が、お亡くなりになられている。戦争は、喧嘩のようなものである。そんな国同士の喧嘩に、このような核兵器を何発も使えば、地球が崩壊する可能性もある。そんなことがあってはならない。長崎を最後の被爆地にするために、戦争は絶対に起こしてはならないと、心に深く誓った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕はこの長崎派遣研修に参加し、とても貴重な体験をさせていただいた。戦争や原爆のことはもちろん、友情、礼儀など、様々なことを学んだ。ここで学んだことは、写真などの資料だけでは学ぶことができないものばかりだった。この貴重な経験を活かし、家族や先生、友達に今回学んだことを、伝えていきたいと思う。

平和への一歩



郡山市立守山中学校2年 石井 皇 誠

1 派遣研修への参加に当たって

私がこの派遣研修に参加した理由は、「1945年8月9日に長崎に原爆が投下された」という事実しか知らなかったからである。正直とても恐ろしいその事実には目を向けたくなかった。研修に行くかどうか迷ったが、先生方からの勧めもあり、徐々に長崎の原爆による被害を知りたいという気持ちが強くなり、長崎派遣事業への参加を決めた。つまり、今回の派遣研修に行って長崎のことをもっと知ることは、これからの私が向かうべき道標を知るいい機会だと思ったのだ。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、戦争、原爆に関する写真が展示されていた。その中でも特に印象に残っているのは、私たちと同じ学年の人が真っ黒こげになり道路で倒れたまま亡くなってしまった写真だ。この写真を見た瞬間、胸が痛くて仕方なかった。私たちと同じ学年の人もたった一発の核兵器で亡くなってしまふことの恐ろしさを思い知らされた。その他にも、女子学生の弁当箱や、手の骨とガラス、ファットマンの造りなどをこの目に焼き付けた。原爆資料館では、これまでに感じたことのないくらい辛く、悲しい気持ちになった。

(2) 青少年ピースフォーラム

まず、ピースフォーラム1日目は、実際に原爆の怖さを目の当たりにした築城さんの話を伺った。その言葉一つひとつに悲しみ、苦しみの感情が混ざっていた。築城さんは、「核兵器を管理」という言葉を口にされた。今現在、この世界には、12,520発の核兵器がある。「核

兵器があるからといって使っていいわけではない。しっかり使わない、使わせないようにしなければならない」と、築城さんの言葉から強く感じた。2日目は、台風の影響で他県からの参加者との交流はなかった。だが、けんかや戦争はなぜ起こるのか、どうすればけんかや戦争はなくなるのかを、同じ班の仲間と真剣に考えることができた。いろいろな意見を出し合い、意見が食い違うこともあった。しかし、一番大切なのは、相手の意見に対して、不満を感じたり、対立したりするのではなく、そういう意見もあるのだという意識の高い考えを持つことだ。「話し合う」というのは、とても簡単そうに見えて、案外難しいことなのかもしれない。

(3) 平和祈念式典

こちらも、台風の影響でテレビを通しての式典参列となった。とても印象に残っている言葉は、「核兵器廃絶」という言葉である。この言葉が出てくるたびに、心の中で「必ず核兵器は無くなる」という強い意識をもつことができた。



< 路面電車 >

3 心に残ったこと

私は、ある路面電車の写真が心に残っている。原爆の威力がどのようなものだったのかが伝わってくるからだ。この電車は、爆心地から最も近かったため、ほぼ全壊だった。この電車に乗っていた人々はみな亡くなってしまった。人々の命を一瞬にして奪ってしまったのだ。核兵器とは、とても残酷なものなのだと改めて感じた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私にとって、とても貴重な4日間だった。なぜなら、新たな友達との出会いや関わり方はもちろん、はじめは詳しくわからなかった原爆の恐ろしさについて知ることができたからだ。一瞬にして尊い命を奪っただけでなく、今もなお被爆した人々の心や体に多くの傷が残っている。このとても貴重な経験を通して、戦争は決してやってはならないことだと改めて知ることができた。核兵器がどれだけ悲惨なものか、どれほど命を奪いたいのか、恐怖をどれだけ押し付けたいのか。考えたいことはたくさんある。「平和」「核兵器の廃絶」どれほど皆が願っていたのか。もう戦争は起こしてはならない。もう二度と原爆が落ちないように「ナガサキを最後の爆心地に」。「平和」のために小さな一歩でも「平和」に向かって歩いてゆく。もう二度と、苦しい思いをくり返さないために。

戦争と平和を身近に感じて



郡山市立高瀬中学校 2年 伊藤 涼 世

1 派遣研修への参加に当たって

「日本は唯一の核爆弾被爆国である。」これは、私が小学生だった時に知り、衝撃を受けた事実だ。

小学生の時は核兵器についての知識も少なく、戦争も、遠い歴史のこのように感じていた。

中学2年生になり、学級活動の時間に先生から派遣研修のお話を伺った。戦争や平和について学ぶことができるチャンスだと思い、今回の派遣研修の参加を希望した。

この研修を通して平和の尊さ、戦争の悲惨さについて学び、核兵器によって引き起こされた残酷な真実を多くの人に伝え、未来へと繋ぎたいと考えた。

2 派遣研修に参加して

(1) 旧城山国民学校

城山小学校は、爆心地から西に500m離れたところにあり、爆心地からもっとも近いところにある国民学校だ。爆心地に垂直に建てられていたため、爆風による被害が少なく、今でも倒壊することなく残っている。

校舎内には、先生や生徒の遺品、被害当時の写真などが展示されていた。それらから、戦争の恐ろしさ、核兵器を使用することの悲惨さが痛いほど伝わってきた。

当時学校に通っていた生徒たちは、長崎に原爆が落とされるなんて、思いもよらなかっただろう。平和な生活を送っている私たちは、当たり前のように食事や勉強を行い、安心して眠ることができる。このことをはじめ、今できることの何もかもに感謝して生活をするのが大切だと思った。

(2) 平和公園

天をさした右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、倒した右足は原子爆弾投下後の静けさを、立てた左足は救った命を、閉じた目は戦争犠牲者の冥福を。これは、平和公園内にある「平和祈念像」の特徴的なポーズの意味である。そしてこの祈念像は、正面ではなく、爆心地の方向を向いている。「平和祈念像」には、戦争で被害にあった方々の、「もう二度と戦争は起こしてはならない。」という強い思いが込められていると感じた。

私が平和公園周辺で印象に残っているのは、「平和の泉」だ。この泉は、原爆でやけどを負い、水を求めて亡くなっていった方々の冥福を祈ってつくられた。私は「平和の泉」を初めて見たときは、「綺麗だな」という薄い感想しかわいてこなかった。原爆資料館を見学し、熱線によってやけどやケロイドといった症状の画像などは地獄ともいえる光景だということを知った。今でも「平和の泉」を思い出すと、被災者の苦しみや叫びが、痛いほど伝わってくる。もう二度と同じ光景を私たちや私たちの子孫が見ることのないように、この事実をたくさんの人に伝え、広めていかなければならないと改めて感じた。



< 長崎平和公園母子像 >

3 心に残ったこと

長崎の平和公園内、その周辺には、「平和祈念像」や「平和の泉」などがあり、特に有名でよく知られていると思う。しかし、平和公園周辺で私の中で一番印象に残っているのは、「平和祈念像」でも「平和の泉」でもなかった。私が今回の派遣事業で一番印象に残っているのは、平和公園周辺に建てられている「母子像」である。

長崎市は、1997年7月16日、平和公園に被爆50周年祈念事業碑として「母子像」を設置した。高さ約5mにもなる「母子像」は、「母の胸に眠る傷心の子供の姿」によって、21世紀にはばたく日本の未来、平和への決意を表現している。

私はこの祈念像を見たとき、多くの人々の命や生活、未来を奪った核兵器を許せない気持ちになり、戦争の悲惨さに改めて気づかされた。

この「母子像」に限らず、長崎にも広島にも、母子像や大人と子どもをモデルとした祈念像が多く存在した。それらのことは、心身ともに傷つきながらも、必死で命のバトンを繋いでいった被災者やその遺族の方々を表現してもいるのではないかと感じた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4日間の派遣研修を通して、私は平和の尊さや戦争、核兵器の恐ろしさについて多くのことを知り、学びを深めることができた。

また、4日間もの間、異なる中学校の友達と毎日過ごすことで、コミュニケーションの方法や積極性、自分のことを伝える大切さなど、これからの社会を生きていくうえで、たくさんの大切なことを学ぶことができた。

私は、これからも、たくさんの人にこの体験で学んだことを伝え、戦争について、核兵器について深く考えたことを、もっともっと多くの人に知ってもらいたいと思う。被爆者や、その遺族の方々のため、これからの未来を生きる方々のためにも、私たちは平和の大切さ、原爆の恐ろしさを心に刻み、長崎を最後の被爆地にするために行動し続けることが私たちの役割だと考える。

平和な世界へ



郡山市立郡山第一中学校2年 山口 雄 奨

1 派遣研修への参加に当たって

私が初めて戦争について学習したのは小学校の時である。8月6日に広島、8月9日に長崎へ原子爆弾が落とされたのもその時に知った。悲惨な状況に怖く、悲しくなったのを覚えている。

今年には戦後78年である。私の周りには戦争を体験した人がもういない。戦争を体験された方々が少なくなる中で、直接話を聞き、深く学ぶことができる機会は貴重だと思った。原子爆弾はなぜ長崎に落とされたのか、どのようにして長崎の町が復興していったのかを知りたいと思い、今回の研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆博士とは、白血病にかかり「あと3年」と余命宣告をされた2か月後に原爆によって被爆しながらも、日本での放射線医学の普及と発展のために研究と診察を続けた医学博士である。原爆によって妻を失い、自身も重傷を負ったが、他の被爆者のために力を尽くした。

余命の3年を2人の子どもと過ごしたのが「如己堂」。この如己とは「己の如く隣人を愛せよ」と聖書に記されている、永井博士が大切にしていた言葉から付けたものである。広さは二畳一間という狭さ。永井博士は、この如己堂で寝たきりでありながらも、様々な書物を書き上げた。

その中で、心に残った言葉が2つある。

「本当の平和をもたらすのは、ややこしい会議や思想ではなく、ごく単純な愛の力による。」
（「いとし子よ」より）

「闘争だの戦争だのという騒ぎは、おくびよ

う者がやるのである。『愛』の人は、すなわち『勇』の人であり、勇の人は武装しない。武装しない人は戦わない。つまり『平和』の人である。」（「平和塔」より）

平和を願って世界中から戦争をなくしたい気持ちが伝わってくる。今も世界では戦争中の国がある。お互いに武器を持ち、銃を放つ限り戦争は終わらない。永井博士が訴え続けた「平和」の尊さを私たちが語り継いでいかなければいけないと感じた。

(2) 原爆資料館

たくさんの写真が展示してあり、想像していた何倍もの悲惨な現実という言葉を失った。11時2分で止まった時計、商店跡から発見された、溶けてくっついた6本の瓶、高熱によりくっついた人の骨とガラス。普通ならあり得るはずのないものがそこにはあり、今の平和な日本からは想像できない戦争という事実があったことを実感した。被爆された方々、悲惨な状況を見た方々のことを考えると、心が痛み、とても悔しく感じた。

軍用基地が多くあり、実験に適している地形だったことにより、長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン（ふとっちょ）」。大きさ約3メートル、重さ約4.5トンのプルトニウム型爆弾。被害が一番大きくなるように、地上500メートルで炸裂させ、10万人近くもの命を奪った。被害が大きくなるように研究をしていた人々がいたと思うと悲しくなる。今も世界には約12,520発の原子爆弾があふれている。絶対に命を奪うために使ってはいけないと強く思った。これらの核兵器がなくなった時こそ、本当に平和な世界へと変わってゆくのだと思う。



< 被爆したカラスザンショウ >

3 心に残ったこと

この木は、爆心地からわずか500メートルという至近距離で被爆したカラスザンショウの木である。幹の左下の部分が熱線や放射線の影響で、黒く焼けており、樹皮がはがれている。原爆の威力を物語っているようで圧倒された。旧城山国民学校（現・長崎市立城山小学校）の敷地内で、戦後隣で成長したムクノキに支えられながら2017年7月に枯死するまで約70年間も生きていた。毎年春になると芽吹いていたそうだ。2021年までは保存処理をして、そのまま現地に残っていたが、状態の維持が厳しくなり校舎内へ移設展示された。

高さ約6メートルの木が室内にあるのには驚いた。戦後の人々に「生きる」ことの大切さを訴えているように感じた。たった一発の原子爆弾で、あらゆる建物が破壊され、何万人もの命が奪われた。その中で生き残り、人々を元気付け、人々から愛され大切にされてきた様子が伝わってきた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

初めて行った長崎は、とても緑豊かなきれいな町だった。ここに原子爆弾が落とされたなんて想像できなかった。

4日間の派遣研修に参加して、被爆された方の体験談を聴いたり、施設見学をしたりして、命の大切さ、平和の尊さ、核兵器の恐ろしさを学ぶことができ、とても貴重な経験になった。たった一発で辺り一面を破壊し、生き物の命を奪い去る核兵器は、世界中からなくさなくてはならない。ここ長崎を「最後の被爆地」とするために。

平和は当たり前ではない。世界で唯一の被爆国の日本から、戦争、原子爆弾の悲惨さを伝え、二度と同じ惨状を繰り返させないようにしてはいけない。そのために、被爆者の想いを私たちが受け継ぎ、「核廃止・核絶滅」を伝えていきたい。

「如己愛人」おのれのごとくひとをあいせよ。平和を実現するために、永井博士がそうしてきたように私も周囲の人にやさしくできるようになりたい。

平和を尊ぶ



郡山市立郡山第二中学校2年 十 林 權

1 派遣研修への参加に当たって

核兵器のない平和で安全な世界の実現は、世界各国共通の願いである。しかしながら、世界は常に核兵器の脅威にさらされている。

78年前、アメリカ合衆国により原子爆弾が投下され、日本は世界で唯一の被爆国となった。当時の長崎には造船所や製鉄所があり、日本軍の重要都市だった。太平洋戦争、核兵器の犠牲となった長崎。その歴史を知ることが、今、混沌としている世界に、改めて平和を唱えるために必要なことであると考え、長崎派遣研修への参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

熱線によって沸騰した瓦、ガラスの突き刺さった衣服、放射線の影響により腫大した脾臓。目を覆いたくなるような写真や展示物が、原子爆弾の威力を物語っていた。

長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の原寸大模型を目にした時には、これが一瞬にして都市を焼け野原にしてしまったものなのか、およそ7万4千人もの命を奪ったものなのかと、なんとも言えない威圧感と恐怖を覚えた。盆地という地形でなければ、長崎の被害はもっと大きいものだったであろうとバスガイドさんが教えてくださった。原子爆弾の殺傷力、破壊力は、他の兵器とは比較にならないものであることを知った。

核兵器の使用は非人道的行為であることを、広島、長崎の多くの方々の犠牲のもとに私たちは知ることができている。日本は世界で唯一の被爆国であり、核兵器廃絶を訴えながらも、アメリカの「核の傘」に守られている。この矛盾

した状況から勇気をもって脱却する日本であってほしいと切に願う。

(2) 被爆体験講話

「私は長崎師範学校在学中の18歳だった時、学徒動員された軍需工場の寮で、夜勤に備えて就寝中に被爆しました。」築城昭平さんが、被爆当時の体験を語ってくださった。熱線により皮膚はただれ、神経が麻痺していたため、自分が大やけどを負ったことにも気付かなかった。隣の友人の顔は酷く焼けたでれていた。その体で10キロ離れた治療所まで歩いて行った。築城さんの記憶は今でもとても鮮明である。思い出したくもない辛い体験であるにも関わらず、私たちに伝えてくださっていることに、胸がぐっと締め付けられるような思いになった。戦争を知らない私でも、当時の悲惨な光景を想像して苦しくなった。

平和な日常は尊い。戦争は、そして核兵器は、その平和を一瞬にして吹き飛ばしてしまうことを忘れてはいけない。核兵器の恐ろしさを後世に伝え、核兵器廃絶の声を上げ続けることが、中学生の私にもできる「平和な世界」への道なのではないだろうか。

(3) 青少年ピースフォーラム

長崎派遣事業に参加した仲間と、「戦争の原因は何なのか」「けんかが起こる原因は何か」話し合った。宗教の違い、資源の取り合い、領土の奪い合い、利己的な考え方、など真剣に考えた。

生まれながらにして戦争を望む人はいない。誰もが戦争のない世界で生きることを望んでいる。しかし、世界は常に戦火が絶えない。秩序が乱れ、話し合いで解決することができず、市民の自由や平穏な暮らしを奪う。核兵器による



< あの日のある少女の手記 >

威嚇、戦争は、遠くの国の出来事ではない。今ある平和を必死で守っていく必要があると強く感じた。

3 心に残ったこと

体中に大やけどを負い、水を求めた少女、被爆当時9歳だった山口幸子さんによって書かれた『原子雲の下に生きて』の一説が石碑に刻まれている。被爆者の多くが「水を」「水を」とうめき声をあげながら水を求めさまよった。9歳の少女の一説は、短いながらも、当時の凄まじい惨状をくっきりと映し出していた。街中が燃え、汚水も溢れ出ていたであろう。たくさんの人の体が焼かれ、体液がドロドロと流れ出ていたであろう。そんなすべてが入り混じった、油のようなものが浮いた水であっても口にしてしまうほどの、激しい喉の渇き、体の異常なほてり。とにかく水が欲しかったのだ。水を求めて川に入り、水を飲むことができたとしても、命を落とした人がたくさんいる。そんな油のようなものが浮いた水さえも、飲むことができずに息絶えた人もたくさんいる。水を得られても、得られなくても、どちらにせよ多くの人が命を落とした。なんという地獄だ。

9歳の幼い少女は、油のようなものが浮いた水を飲む選択をした。その痛ましい事実を自分事のように感じることは難しい。けれども、その状況を想像し、忘れてはいけないうこととして自分の胸に刻むことは、14歳の私にもできることだと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

大型台風の接近により、残念ながら平和祈念式典会場に足を運ぶことはできなかった。宿泊施設でテレビ視聴となったが、心から平和を祈る貴重な時間となった。

長崎市長、鈴木史朗氏の平和宣言の中で紹介された被爆者の一人、谷口稜暉さんが生前残した言葉が印象に残った。

「過去の苦しみなど忘れられつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」

本当の平和な世界は、核兵器の廃絶によってはじめて実現されるものである。互いに核兵器をちらつかせながら生きる世界に、平和な未来は存在しない。現在の平和な生活は、78年前、原子爆弾の犠牲となった先人の訴えによって守られているということを、私たちは決して忘れてはならない。核兵器廃絶を唱え続けること、平和がいかに尊いものであるかを語り続ける一人になること、それが研修に参加した私の使命である。今回、長崎派遣事業に参加する機会に恵まれたことは、私の記憶に生涯残る大切な時間になったことは間違いない。

最後に、派遣研修への参加を後押ししてくれた家族と先生方、研修期間中の私たちの学びをコーディネートし、サポートしてくださったすべての皆様に感謝したい。

平和の実現に向けて



郡山市立郡山第三中学校 2年 佐久間 美 和

1 派遣研修への参加にあたって

戦争や紛争、世界平和の言葉が至る所で見られるこの時代。平和の大切さを訴える目的で今や、教科書にまで戦争の史実が載っている。しかし、戦争の恐ろしさや残酷さを、真に理解しようとする人は、世界中のわずか一握りであろう。

2022年から始まった、ロシアによるウクライナ侵攻。これは1年以上経過した今でも続いている。ウクライナ侵攻という事実は、世界平和という意識が全ての人々に根付いていない証拠だろう。

今後が不安になっていたそのころ、先生から長崎派遣事業について伺った。長崎はかつて戦争により甚大な被害をこうむっている。そして、原爆による被害を受けた最後の地だ。現地に行くことで、きっと得られる何かがあるのではないかと。平和の実現に繋がるきっかけを求めて、私は長崎派遣事業への参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 城山小学校

城山小学校は、爆心地から最も近い国民学校で、半径 500m 地点に位置している。そのため被害も大きく、校舎の 2・3 階部分は全焼。当時勤務していた教職員 31 名のうち 28 名が亡くなられたそうだ。今では被爆した建物を資料館として開放し、原爆の被害と悲しみを伝え続けている。資料館内には被爆直後の周囲の様子と、原爆を体験したであろう子ども達の言葉が残されていた。中でも印象的だったのは、ある少女の体験だ。放射線障害で亡くなった親友のご遺体を、自分の手で焼いたのだという。その時の少女の気持ちを考えると、胸にこみあげ

てくるものがあった。

(2) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原爆の被害を物語る、様々な資料が展示されていた。11 時 2 分で止まった時計、溶けてつながったガラス瓶、炭化し真っ黒になった弁当箱。全てが、何気ない 1 日に起きた長崎の地の惨状を表している。また、原爆の熱線と放射線は人体にも影響を及ぼした。

原爆の炸裂により、骨まで一瞬で焼かれた人や原爆症に苦しむ親子の写真を見たが、到底人の姿とは思えない、ひどく残酷なものだった。

しかし、こういった行為をかつての日本もしていたかと思うと、やりきれない悲しみと罪悪感をおぼえた。「日本は確かに、原爆により大きな被害を受けたが、それはこの国だけじゃない」

戦争に関わった人々は心身共に、簡単には消えない大きな傷を負っている。そして、戦争は悲しみと憎悪しか残らない。私は改めて、核兵器の廃絶と平和の実現がいかに重要かを理解した。

(3) 青少年ピースフォーラム

平和会館では、青少年ピースフォーラムが行われた。そこでは全国各地から集まった、同年代の人々との交流を通じて、戦争や核兵器、平和についての意見交換を行った。様々な活動に取り組んだが、特に心に残っているのは、築城さんによる被爆体験講話だ。当時 18 歳だった築城さんは、原爆によって全身やけどを負ったそうだ。そして、今でも左腕にやけどの跡が残っている。そんな彼は自身の被爆体験を語る中で「戦争の記憶を多くの人に伝えることが私の使命だ」と話した。被爆体験者が年々少なくなっ



< 平和の鐘 >

ていく中、何とか次の世代に戦争の記憶を伝えたい、という彼らの想いをしっかりと受け止め、今度は私達が発信していきたい。

3 心に残ったこと

私にとって一番印象的だった場所は、やはり平和公園だ。園内には、平和を祈って様々なモニュメントが設置されている。

上の写真はその一つである、平和の鐘を撮影したものだ。この鐘には、長崎の人々の平和への願いが込められている。現在でも8月9日の原爆の日には、毎年この鐘が鳴らされるそうだ。

長崎の人々は、どんな思いでこの鐘の音を聴いているのだろうか。この鐘を見る度に、いったい何を思うのか。きっと、戦争によって亡くなった方々を偲びながらも、復興に向けて前向きな気持ちを抱くのだろう。

この平和の鐘はきっと、そんな長崎市民の心よりどころとなっている。だからだろうか、実際に平和の鐘を見ると、心が温かくなった。

戦争の残酷さと生み出す悲しみ、失われる命の尊さを知った上で、平和について語る現地の方の言葉には、しっかりとした重みがあった。

戦争を自分事として考えた上で、戦争反対の姿勢を示すこと、これが、平和の実現に向けてできる、私達の役目だろう。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は今回の長崎派遣事業を通じて、戦争という過去と平和に対する受け止め方に変化が生まれた。教科書や書物内で語られる、他人事のような戦争の歴史。それを、現地を訪れ、自分の目で見ることで、はっきりと実感することができた。戦争当時から今現在まで、人々がたどってきた復興までの道のりとそこに至るまでの様々な困難。それらはきっと、長崎の地を実際に訪れるまでわからなかったものだ。

戦争も核兵器も、罪のない人々の命を一瞬にして奪っていく。そこに残るものは何もない。だからといって、戦争や核兵器をすぐになくすることは不可能だろう。だが、核兵器が世界に存在する以上、本当の平和を手に入れることは難しい。私たちにできるのは、戦争を、核兵器をなくすために声を上げ続けることだ。どんなに小さな行動でも、それは平和の実現に向けた、大きな一歩になるだろう。

最後に、長崎派遣事業参加にあたり、関わってくれた全ての方々に感謝したい。今後は、今回得た知識と体験を基に、平和の大切さを広めていきたい。それが、未来を担う私達の重要な使命なのである。

長崎を最後の被爆地にするために



郡山市立郡山第四中学校 2年 七 海 聖恋亜

1 派遣研修への参加に当たって

2022年2月24日、ロシアによるウクライナ戦争が始まった。テレビのニュースでは、近代兵器を使用した悲惨な状況が報道されていたのを何度も目にした。現在も続いている。

広島、長崎に原爆が落とされたことは知っていたが知らないことがたくさんあった。その、「知らない」を「知る」に変えるために、この長崎派遣に参加することを決意した。良い機会をいただいたことに感謝している。被爆を経験した方々は高齢者の割合が高くなっている。高齢者が次世代の子どもたちへ原爆について一から話すことは簡単なことではないだろう。それを私たち長崎派遣団が次世代の子どもたちに伝えていきたいと思う。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

原爆資料館で目にしたものはすべて衝撃的なものだった。午前11時2分で止まった時計、焼けて焦げた人、熱線を受けた人の写真、ファットマンと呼ばれる長崎に落とされた原爆の実物大の模型。資料館には約1,500点もの被爆当時の資料が展示されていた。私が特に印象深く残ったものは原子爆弾、「ファットマンの実物大の模型」だった。それを見たとき想像していた何倍も大きく、言葉が出なかった。そのファットマンの長さは、3.2512m、直径は、1.524mだ。長崎市の面積と比べれば、針の穴ほどの非常に小さいものだが、威力は何万人もの命を失くすほどだ。こんなものが長崎に落とされたのだと思うと心が痛く、恐ろしく思うばかりだった。それらの展示物を見ているとそこに住んでいた人たちの幸せが一瞬にして奪われたことが

わかった。

現在の世界にも、核兵器が約1万個もあると思うと怒りが湧き出てくる。もう二度と核兵器の使用を無くしたい。

(2) 青少年ピースフォーラム

予定では、2日間に渡り全国の小中学生、大学生との交流をする青少年ピースフォーラムが開催される予定だったが、台風接近により2日目は中止になってしまった。だが、1日だけの交流会でも学べることはたくさんあった。特に、当時18歳で被爆した築城さんによる話は印象深かった。一つ一つの言葉が重く、私の胸に刺さった。築城さんはこうおっしゃった。

「昼間にも関わらず、夜のように一瞬で灰に包まれた。」

この言葉を聴いて涙が溢れそうになった。一瞬で灰に包まれるほどの威力には驚かされた。実際に被爆した人から話を聴くことは、最も貴重な時間を感じられた。

(3) 永井隆記念館

永井隆博士は、原爆が落とされたことによって自身が重傷を負ったにもかかわらず、信仰するキリスト教の教えに従って救護活動を行った人だ。永井隆が残した本には、彼の平和への願いがたくさん込められていた。

「長崎がピリオッド！」

「おろかな戦争を引き起こしたのは私達自身なのだ」

1つ目の言葉にはこれ以上被爆地を増やしてはならないという祈り、2つ目の言葉には戦争という道を選んだ日本への戒めが込められている。



< 石碑に刻まれたメッセージ >

3 心に残ったこと

.....

のどが乾いてたまりませんでした

水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました

どうしても水がほしくて、とうとうあぶらの浮いたまま飲みました

—あの日ある少女の手記から—

石碑に刻まれたこの言葉は、9歳の時に被爆した山口幸子さんの手記に書かれていたものだ。当時原子爆弾が落とされ、熱線と爆風によって体が焼きただれ、水を求めながら亡くなる方が多くいた。水を求めるあまり、水に顔を突っ込んだまま亡くなる方もいたそうだ。

そんな地獄のような景色の中、9歳の少女が、「油の浮いた水」という、飲める状態ではない水を飲んだことに衝撃を受けた。油が浮いている水を飲むことは危険で、抵抗のあることだと思う。しかし当時は、そんなことを考えているほど余裕がなかったのだろう。それほど水を求めていたという緊迫した切実な状況に心が痛くなった。同時に原爆が落とされた怒りも湧き出てきた。もしも、私たちも同じ状況になったらどうするのだろう。油の浮いた水を飲むのだろうか。それとも危険だと思い飲みたくても、油の浮いた水だから我慢するのか。いくら考えても、結論は出てこない。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣事業を通して、教科書だけでは学ぶことのできない命の尊さや戦争の悲惨さを学ぶことができた。この長崎での研修は、わたしにとって貴重な経験になった。この先きっと思えることができないだろう。

長崎には初めて訪れた。景色がとてもきれいだった。こんな街に本当に原爆が落とされたのか？と、信じられない気持ちでいっぱいだった。

原子力爆弾が2度も日本に落とされたことは決して忘れてはいけない。原子力爆弾の使用を、日本が最初で最後になるように、私たちはこれからも次世代の子どもたちに戦争の悲惨さや命の尊さを伝えていかなければならない、長崎を最後の被爆地にするためにも。

今、核兵器を持つことを正当化している国々が増えてきている。核兵器の脅威に対抗するためには、同じ核兵器で武装しなければ対抗できないという考えを持っているからである。どうしても、核兵器を持たないという選択枝を選ぶことはできないだろう。同じ人間として、悲しい気持ちしかない。世界の人々が同じ間違いをしないように心から願いたい。巨大なエネルギーが、戦争ではなく、世界平和のために、地球の環境保全のために有効利用できるように、期待したい。

忘れてはいけない原爆



郡山市立郡山第五中学校 2年 菅 家 琴 芭

1 派遣研修への参加に当たって

私は戦争や原爆のことが他人事のように、身近なものではないと思っていた。私の家族や親戚から戦争や原爆の話は聞いたことがなく、戦争や原爆のことは学校の授業で教わったことしか知らない。戦争があったという事実しか知らない。私は、いつか原爆や戦争があった現地に行き、何が起きたのかを肌で感じたい、その時何が起きたのかをいつか詳しく知りたいと思っていた。

2 派遣研修に参加して

(1) 城山小学校

城山小学校は原爆が投下された当時、鉄筋コンクリート3階建てだった。しかし爆風の影響で2・3階は全焼した。そして学校には1,500人の児童が通っていたが原爆により1,400人の児童が亡くなった。教職員も28人が亡くなった。当時城山小学校は爆心地から西方500mの場所にあった。そのため被害が大きかった。被爆前と被爆後の校舎の写真、戦時中の学校での様子を描いた絵など多くの写真や絵があった。私の中で一番衝撃を受けたのが先生方の写真だ。原爆で多くの若い命が奪われたのはもちろん先生方も多く亡くなった。掃除をしていた先生・仕事をしていた先生・子どもたちを守って亡くなった先生など場面は違うが先生方の命も多く奪われた。亡くなった先生方はみんな10代後半や20代であった。まだ未来がある子どもたちや先生方の命を奪ったと考えると胸が痛くなる。私は亡くなった先生方の写真を見て一瞬で奪われてしまう怖さを痛感した。

(2) 青少年ピースフォーラム

被爆体験講話を聴き、戦争の疑似体験をした。被爆体験講話では当時18歳で被爆した築城昭平さんのお話を聴いた。当時の悲惨な状況が頭の中に浮かび、想像するだけで苦しくなった。当時の情景がリアルと伝わってきた。被爆体験講話では戦争のことについて深く知ることができ、被害も詳しく知ることができた。戦争を身近に感じることもできた。とても貴重な体験になった。

戦争の疑似体験では自分の大切な人、もの、場所をカードに書き、戦況が悪化していくたびカードを手放した。手元にあったカードが少しずつ減っていき、最後には1枚しか残っていなかった。

自分の大切なものがなくなっていくのが辛く、なくなっていくたび心が痛くなった。しかし自分の周りには多くの大切なものがあって、大切なものに囲まれて生きているのだと気付かされた。疑似体験を通して大切な人やもの、場所がなくなる怖さを実感することができた。そして戦時下での大変な生活を肌で感じることもできた。



< 溶けた6本のガラス瓶 >

3 心に残ったこと

これは熱線によって変形した「溶けた6本のガラス瓶」だ。400m 離れていた商店街にあったのだが、高温の熱線により溶けてしまったのだ。これまで多くの写真や展示物をみてきたが、溶けたガラス瓶はとても印象に残った。熱線の恐ろしさが瓶を見て分かった。それまでは黒く焦げた建物を見ても人々が熱線によって亡くなってもあまり熱線の怖さを理解することができなかった。

しかし溶けたガラス瓶を一目見て熱線の怖さ・威力がわかった。瓶が溶けるにはかなりの高温でないと溶けない。だがガラス瓶は溶けた。熱線がとても高温だったことがわかる。私は瓶を見て、熱線を受けた人は苦しく辛い思いをしたのだろうと思った。どれだけの人が苦しんだのか想像できない。熱線が雨のように降ってきた状況をもう二度と作りたくないと思った。溶けたガラス瓶を見て戦争を起こしてはならない、そして原爆の被害を多くの人に伝えようと心から強く思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣に参加して私が暮らしている日々は当たり前ではなく、今幸せに暮らしているのは奇跡だと思った。昔は、明日何しよう、何が食べられるのだろうかなど今では当たり前

のことを考えることもできず、考える暇もないくらい生きるのに必死だった。私は今回の研修で多くの被爆したもの・人・被害・原爆で苦しんだ人々を見てきた。それらを見ていると、私達が住んでいる世界はどれだけ幸せで平和なのかがよく分かった。今ある“幸せ”や“平和”は簡単に崩れてしまうものでもある。被爆をした人、体験を語り継いでくれる人がいるから今の平和があると思う。「平和」とは日々穏やかに過ごせて、食事ができて、勉強ができて、友達ができて、安心して寝られる何気ない日々だと思った。今、生活できていることに感謝し毎日を無駄にせず過ごしていきたいと思った。

原爆のことを十分に知った。原爆は罪のない人、尊い命を無差別に奪う最悪なものだと知ることができた。7万4千人の命を奪い長崎を焼け野原にした原子爆弾。もう二度と悲惨な世界をつくらない、そして長崎を“最後の被爆地”にするために長崎派遣で学んだことを多くの人に伝えていきたい。話すこと・語り継ぐことはとても大切だと学んだ。今原爆や戦争について知っている人は減ってきている。原爆と戦争のことを風化させてはならない。そう思った。4日間で学んだことを次の世代にしっかりと伝えて、平和のバトンを繋げていきたい。平和な世界がずっと続くよう自分に何ができるか、できることを探しながら過ごしていきたい。

平和への願い



郡山市立郡山第六中学校2年 七 海 弥麻人

1 派遣研修への参加に当たって

私がこの長崎派遣に参加しようと思ったのは原爆が落とされた長崎県に実際に足を運び、原爆の恐ろしさや、平和の尊さについてしっかりと学びたいと思ったからである。

私は派遣研修にあたり目標を立てて参加した。

1つ目は、学校の代表としてふざけず、真面目に研修に臨むことだ。この研修はただの旅ではなく代表として、責任をもって最後までしっかりとやりきるという意識で参加した。

2つ目は、たくさんの人と話し交流を深めることだ。今回の研修は自分ひとりではなく、郡山市内の他の学校のみなさんと一緒に行き学んできた。

現地に行く前に自分なりに調べて知識を得て研修に参加した。そして、帰ってきたら学校みんなに「原爆」の恐ろしさ、平和の尊さを知らせ、忘れないようにしたい。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

まず長崎に着いて一番初めに見学したのは「永井隆記念館」だ。この記念館には永井隆先生の人生の記録が残されている。記念館の外には永井先生が当時詩などを書いていた、「如己堂」があり、その広さは畳2畳分の広さとなっている。このことを知ったとき私はとても驚いた。そして、自分の病気を患いながらも患者のことを一番に考え、たくさんの人を治し、そして、自分の家族に「詩」をたくさん書いていたということを知ったときはとても驚いた。

永井先生は長崎原爆被爆から約3年後の1948年に如己堂に2人の子どもと移り住み、療養中にたくさんのお名作を書き上げた。記念館

にも当時の作品が飾られている。

(2) 平和公園

この公園には「原爆の爆心地」や「平和祈念像」などがあり、それらを見学した。平和祈念像は自分も聞いたことがあるが見学するのは初めてだったため楽しみにしていた。実際に見学してみると、とても大きく迫力がすごかった。有名なあの手の形にもきちんとした意味があることにも驚いた。他にも被爆した当時の地層や平和の泉なども見学をした。どれも、印象に残る展示物でそれらに込められた想いなども学ぶことができた。

(3) 長崎原爆資料館

この資料館には長崎原爆で被爆をした人たちの記録や被爆をした後の残骸などが展示されている。館内に入ってすぐに「千羽鶴」がたくさん飾られており、色々な所から送られてきていることを知った。展示コーナーの最初には、原爆投下時刻「11時02分」で止まってしまった、壁掛け時計が展示されていた。状態は非常に酷くボロボロになっており原爆の悲惨さが見てすぐ分かった。あの壁掛け時計は原爆の恐ろしさを伝える重要な展示だと思った。その他にも館内にはたくさんのお展示がされていたのでぜひ行ってみたいと思う。



< 原爆の恐ろしさ >

3 心に残ったこと

私はこの長崎研修を終えてたくさんのことを学んだ。それは、「原爆は笑えない」ということだ。原爆によってただ平和に日常を過ごしていた日本の国民が無残にも殺され、今でも原爆被害を受けた人が苦しんでいる。当時の私たちと同じ中学生や私たちよりも小さい小学生が何人も亡くなった。当時は食べ物を残したり、自由に遊んだりすることができなかった子どもたちがたくさんいた。このことを知らない今の子どもたちも何人もいる。皮膚が焼け落ち、放射能で髪が抜け、周りの人たちは皆黒焦げ、土地までもボコボコで黒くなっている。このような痛々しい風景を見たことがあるだろうか。このような風景があの日たった一つの原爆でなくなってしまった。そして、何万人もの人々の命を一瞬にして奪った。

当時のアメリカ軍がより大きな被害が出るよう、上空 500 メートルで原爆を炸裂させたということを知ったときは、とても卑劣で残酷だと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの長崎研修に参加する前は自分がしっかりと最後まで学びきれるか不安だった。長崎は歴史が深く原爆もその歴史の一つである。実際にいろいろな所にまわり、ガイドの人たちの話を聴いてみると、原爆投下から 78 年たった今でも苦しむ人がいると聴いたときは原爆の恐ろしさを知った。長崎原爆資料館には今ではありえないような物や、痛々しい写真などが展示され、今の原爆を知らない人たちに多くのことを伝えている。そんな中でも自分たちにもできることがたくさんあると感じた。それは、私が学んだことを長崎原爆資料館のように、周りの人や家族の人たちに広めることだ。そうすることで亡くなってしまった人たちが少しでも報われると思う。この長崎研修は私にとってとても勉強になった。他の人にも生きているうちに長崎まで足を運び、しっかりと知識を得て、色々な人に広めてほしいと思う。そして、私も、学んだことを忘れないようにしようと思う。また、4 日間の間に一緒に学びあった人たちに感謝を伝えたい。「ありがとう。」

平和を願って



郡山市立郡山第七中学校2年 川島璃子

1 派遣研修への参加に当たって

私は、戦争について何も知らなかった。正確に言うと、知ろうとしていなかったと言う方が正しい。私は、戦争や核兵器などについて考えるのが嫌で、毎年ある平和祈念式典のテレビ中継も、一度も真剣に見たことがなかった。しかし、2022年にロシアがウクライナに侵攻してからはそのことが頻繁に報道され、戦争が急に自分にとって身近なものであるということを感じた。そして、このまま戦争を知らないまま大人になってもいいのかと自問自答することが自然と多くなり、私が家族や友達と共に普通に生活できていることのありがたみも感じるようになった。

そして、まずは日本の過去を知り、自分の目で見たこと、自分の耳で聴いたこと、自分の心で感じたことをできる限り多くの人に伝える努力をしようと思い、私はこの長崎派遣への参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

長崎に落とされた原子爆弾、ファットマンの実物大の模型が展示されていた。この1発の爆弾によって何万人もの人が亡くなり、何万人もの人が負傷し、長崎の地をどうしようもないほどに残酷な姿にしたと思うと、胸が痛んだのと同時に怒りを覚えた。なぜ何もしていない人々が亡くならなければならなかったのか、私は知りたいと思った。

ファットマンの実物大模型以上に心に残った、いや、残ってしまったのは、原形をとどめていない全身火傷の少女の写真と、兄が亡くなった弟を背負って火葬場で立っている写真

だ。この2つの写真からは、「苦しい。おねがい、助けて。もうこんなのは嫌だ。」という心の声が伝わってきて、苦しくてその場にいられないほどだった。戦争や核兵器は、全く罪のない子どもたちの幸せも奪う残酷なものだということ、強く感じた。

(2) 青少年ピースフォーラム

ピースフォーラムでは、ピースボランティアの方々や、私たちと同じように市の代表として派遣された中高生とともに、戦争と核兵器について学んだ。

私がピースフォーラムで心に残ったことは、次の2つである。

1つ目は、被爆体験講話である。私たちは、18歳のときに爆心地から1.8kmのところにあった学校の寮で被爆された、築城昭平さんという方のお話を聴いた。私は、人生で1度あるかないかの貴重な経験ができることにありがたみを感じていたが、同時に悲しくもなった。自分の目の前に実際に被爆された方がいるのだ。そう考えると、様々な感情で心がぐちゃぐちゃになり、何も考えることができなくなりそうだった。

2つ目は、戦争の疑似体験である。疑似体験の前に、自分にとって大切なものや、なくてはならないものをカードに書いた。大きな警報音が鳴り響き、目の前には誰かもわからないような遺体がたくさん。カードに書いたものは全てなくなり、それは戦争によって何もかもがなくなってしまうことを意味していた。とても怖く、戦争や核兵器を使用することがどれだけ恐ろしいことなのかがよくわかった。



< 長崎の空 >

3 心に残ったこと

爆心地からわずか 500m という距離にあった旧城山国民学校。爆心地からとても近い距離にあったが、鉄筋コンクリートでできていて爆心が垂直方向にあったため、奇跡的に爆風による被害が少なく済んだ建造物である。建物自体はあまり被害を受けなかったが、生徒と教師合計 1,531 人のうち、家庭などで 9 割以上の 1,428 人が亡くなった。校舎内の展示物には、原子爆弾投下直後のまちの様子をありのままに映した写真や、全国各地の平和使節団から寄付された千羽鶴がたくさん飾られていた。今自分が立っている場所が多くの方が 1 発の原子爆弾によって亡くなったところだと思えば、胸が締め付けられるようでとても苦しかった。

校舎内の展示物に目が行きがちだが、私は建物の外観にも目を向けた。上の写真を見てほしい。旧校舎のすぐ隣には新校舎が建てられていて、そこは地元の小学生が今も通っている。こんなに身近に戦争について深く考えさせられるようなものがある長崎の子どもたちは、どんなことを考えて生活しているのか。そんなことを考えながら 2 つの校舎を眺めていると、その 2 つの校舎の間からは、青く澄んだ綺麗な空が見えた。これが 78 年前のあの日は真っ黒な原子雲で覆われて見えなかったというのだ。私

は、その事実を信じることができない。こんな綺麗な青空が黒一色で見えなくなったなんて。私の目に映る青空は、綺麗だった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、派遣研修に参加して、戦争や核兵器に対する考え方が大きく変わった。

研修に参加する前の私は、戦争や核兵器などについて考えるのが大嫌いで、話してはいけないものだと思っていた。

しかし、今の私は違う。確かに、それらの言葉を聞くだけで、苦しい、嫌だと感じる人は多いと思う。だが、誰かが声をあげるのを待ち続けていたら戦争は終わらない。核兵器による犠牲者も増えると思う。それを人類は望んでいるだろうか？私はそうは思わない。一人ひとりが戦争や核兵器についての正しい知識と「争いは絶対にしてはいけない」という意識を持ち、声をあげる必要がある。そして、戦争や核兵器について、できるだけ多くの人に自らの言葉で伝える。これは、日本に生まれた私たち全員が果たさなければならない使命だと思う。罪のない人たちが亡くなるのがもう二度とないように。核兵器が世界から消えるように。そして、今が「戦前」にならないように……。

平和を…



郡山市立緑ヶ丘中学校2年 原 田 陽 仁

1 派遣研修への参加に当たって

私は今まで「戦争」というものをあまり深く考えたことはなかった。

しかし昨年ロシアがウクライナに侵攻を始め、何度もテレビなどで悲惨な姿を目にした。この戦争により、今の「平和」が決して当たり前ではないということに気づかされた。

私が今回、長崎派遣事業に参加を希望した理由は、昔、日本でおきた「戦争」や「原爆」の悲惨さを自分自身の目で見て、耳で聞いて確認し、「広島」「長崎」はどのようにして今のようないい町を取り戻したのかを知りたいと思ったからだ。また、同年代の人たちと交流し、さらに考えを広げたいと思ったからである。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆博士は、昭和20年8月9日の長崎への原爆投下により、自らも被爆し、重症を負いながらも医学博士として、無事だった仲間たちとともに被爆者の救護活動にあたった。その後、患っていた白血病が悪化し寝たきりとなってしまったが、「長崎の鐘」「この子を残して」など多くの本を書いて、いのちの尊さや世界の平和を亡くなるまで訴え続けた。

今回タイトルにしている「平和を…」は永井博士が書いた本から引用した。

『いくつかの本を書きましたが、つまるところ私の書いたことは「平和を…」の願いであります』
平和を（原子野録音）より

この言葉に、永井博士が訴え続けた強い想いが込められていると思った。「平和を…」とても簡単に聞こえる言葉だが、世界が平和になるためには途方もない一人ひとりの努力が必要だ

と思う。だから私は、多くの人に核兵器廃絶の重要性を伝えなければならないと思った。

(2) 被爆体験講話

講話をしていただいた築城昭平さんは、被爆当時18歳、長崎師範学校在学中、軍需工場へ学徒動員された。爆心地から1.8kmの学校の寮で当時の夜勤にそなえ睡眠中に被爆。しかし、掛け布団を頭からかぶって寝ていたことで、頭をやけどやケガを防ぐことができた。原爆が落とされた当時を築城さんは、「昼なのに外が夜のように暗かった」「多くの爆弾が落とされたと思うくらいの被害があるのに、1回の爆音しかしなかったから不思議に思った」と語った。築城さんが思う「平和」は、「戦争のない世界」である。そのために後世に伝えないといけないと力強く訴えた。

次の社会を築いていく若い世代の私たちが戦争や原爆の悲惨さを忘れてしまうと、また悲劇が繰り返されてしまうかもしれない。今、世界にある核兵器の数は、12,520個である。「存在する限りは使われる。」だから長崎を最後の被爆地にするためには、私たち若い世代が戦争や原爆の悲惨さ、平和の尊さを語り継いでいかななくてはならないと強く決意した。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムの中で当時の戦時中の暮らしを疑似体験した。けたたましく鳴り響く空襲警報で私たちの生活が変わってしまうこと、戦争が激しく長引くにつれ自分の大切な人、もの、場所が次々に奪われていくこと、その感覚は疑似体験ながらも、とても恐ろしかった。当時の戦時中の人たちが、どれほど辛かったか、どれだけ怖い思いをしていたかを考えることができた。



< 平和を願って >

3 心に残ったこと

上の写真は長崎平和公園で撮ったものだ。手前に見える石碑に刻まれている「——ある日のある少女の手記から」は、9歳の時に被爆した山口幸子さんの手記に書かれていたものだ。原子爆弾が放出したエネルギーの50%は爆風、35%は熱線、15%は放射能であった。爆風と熱線により体が焼けただけ、水を求めて水場には多くの人たちが集まったそうだ。9歳の少女が、「あぶらの浮いたまま」の水を飲むしかない状況だったことに衝撃を受けた。

石碑の後ろにある噴水「平和の泉」は水を求めて亡くなった人たちに、水を捧げて、冥福を祈り、あわせて世界恒久平和を祈念するために建設されたものである。水形は刻々と変化し、平和の「はと」の羽ばたきを表現している。また、つるの港といわれる長崎湾の「つる」も象徴している。

多くの人が水を求めて川に飛び込んだことは知っていたが、その多くの人が亡くなったと聞きとても胸が締め付けられた。

このような悲劇があり、焼け野原となった長崎は、この先70年は草木が生えないと言われていた。しかし約1ヶ月後には草木が芽吹き、虫たちが姿を現したそうだ。多くの人たちが協力し作り上げた長崎の夜景は世界新三大夜景にも選ばれた。夜景を見たとき多くの人々の努力で復興したのだと感じ、とても感動した。

4 派遣研修に参加して感じたこと

「平和」—今回の長崎派遣事業を通して最も考え、話し合い、一番大事にしないといけないと感じた言葉だ。被爆体験講話をしてくださった築城昭平さんは、「戦争がない世界」が平和だと考えていた。

しかし、現在、世界ではいまだ紛争や戦争が続いている。貧困や差別その他にも様々な問題がある。私たちが住んでいる日本はどうだろうか。「平和」だと自信をもって言えるだろうか。「平和」はどのような状態を指すのだろうか。私は、一人ひとりが考える「平和」の形は違うと思う。私が考える「平和」の形は、「一人ひとりが戦争の恐ろしさを知り、二度と繰り返さないこと」だ。長崎に原爆が落とされたこと、多くの人々の生活、もの、場所、そして命が一瞬で奪われてしまったことなどを知ってもらい、平和についてさらに考えるきっかけにしてほしい。

私が考える「平和」の実現のために、まずは親や友達などに今回の派遣で学んだことを伝えようと思う。まだ小さな努力の平和の輪だが、永井博士の「なんじの近き者を己の如く愛すべし」のように、少しずつ一人ひとりの小さな努力の平和の輪が連なり、大きな平和の輪にできるように、まずは自分から行動していきたいと思う。

私ができること



郡山市立富田中学校2年 佐藤雪乃

1 派遣研修への参加に当たって

今まで、戦争や原爆のことについて学校で学び、本やテレビでも目にしてきた。しかし、関心はあるものの、真剣に向き合ったことが無いように思った。今回、実際に被爆地を訪れ、現地の人にお話を聴かせてもらう事は私にとって間違いなく貴重な経験になると思った。

ロシアのウクライナ侵攻が続く中、プーチン大統領は核兵器使用も示唆していて、それに対し広島・長崎市長は連名で抗議文を送ったと昨年ニュースで知った。プーチン大統領の考えを転向させることは難しいが、唯一の戦争被爆国である日本が声を上げることに意味があるのだと強く思ったのを覚えている。

このような事を含め、「世界平和」や「核兵器廃絶」について同じ歳の仲間はどう考えているか興味があり、話し合ってみたいと思ったので今回この長崎派遣事業に参加する事を決めた。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎平和公園

長崎平和公園にある噴水「平和の泉」が印象的だった。被爆して水を求めてさまよった9歳の少女の手記が刻まれた石碑が設置されている。それは喉が渇いてたまらなく、油のようなものが浮いている水を飲んだという内容だった。その少女だけでなく、多くの被爆者が原爆の為に体内まで焼けただけ「水を、水を」とうめき、叫びながら亡くなっていったと聞いた。その惨状は想像を絶するものだ。そんな幼い子どもまでもが犠牲にならなければいけない戦争に何の意味があるのかと、私の心は怒りと悲しみでいっぱいになった。

その夜ホテルで水を口に含んだ時、石碑の少女の事を思い出した。苦しみながら亡くなっていった方々が最後に求めていた水なのだと思うと胸が締め付けられた。

(2) 青少年ピースフォーラム

現在96歳の被爆者である築城昭平さんのお話を伺った。築城さんは爆心地から1.8kmの学校の寮で夜勤に備え睡眠中に被爆したそう。当時はあまりの衝撃に隣の部屋に爆弾が落ちたと思ったと言う。頭からすっぽり布団をかぶって寝ていたおかげで致命傷とはならなかったものの、全身大火傷を負ったそう。築城さんも友人の方も火傷で全身真っ赤になっていたが、神経がやられているせいか痛みなどは感じなかったと言う。自分達の火傷もひどかったが、街には真っ黒に焦げた遺体があちこちにあり驚いたそう。

築城さんはしばらく原爆の事を話すことをしていなかったが、被爆者が実相を話さなければ忘れられてしまうと危機感を持ち、仲間達と話していくことを決意した。思い出すのもつらい被爆体験を私達に話してくださるのは、「核兵器のない世界にしたい」「あんな苦しい思いを次の世代の人達にしてほしくない」という気持ちからではないか。今年で被爆者の平均年齢が85歳になった。私達が被爆者の方のお話を聴ける最後の世代だと思う。実際に体験をした築城さんから聴いたお話を私は大勢の人に伝えようと思った。そしてそれを聴いた人達がまた他の人に伝えていく。そうすることが私達若い世代の使命であると思う。



< 原爆投下20分後のきのこ雲 >

3 心に残ったこと

青少年ピースフォーラムで訪れた平和会館で見た1枚の写真に衝撃を受けた。巨大なきのこ雲の写真だ。原爆投下20分後に爆心地から約9km離れた香焼島の造船所から撮影されたものである。9kmも離れた場所からだと考えられない程の大きさに原爆の威力を思い知らされた。撮影された時、あのきのこ雲の下でどんなことが起こっていたのか。原爆資料館で見た写真や遺品等と重ね合わせて想像した。恐怖で凍り付く思いがした。私はさらに「もしあの雲の下に私の家族がいたら」と想像しようと試みたが、あまりの恐ろしさに思考することさえもできなかった。

研修に参加する前の私は戦争や原爆に関してどこか「他人事」として捉えていたように思う。戦争の悲惨さが想像できる故に踏み込んで学ぼうとしていなかった。でも原爆を投下されたという恐ろしい過去の事実を「我が事」として捉えるべきだということに気付いた。世界中の人々が「もしあのきのこ雲の下に自分がいたら」と考えるならば、おのずと核兵器を廃絶すべきという答えに導かれるはずだ。

平和会館では今年5月に亡くなられた被爆者の深堀好敏さんの写真もあった。深堀さんは言葉だけでは当時の惨状は言い尽くせないという思いから、原爆投下直後の被爆写真を40年にわたって4,000枚を収集・分析し、被爆の実相を伝えた。それでも深堀さんはいつも被爆の

実相が伝わっていないと語っていたそう。私は、それは見る側の問題だと思う。見る人が「他人事」として捉えて見ている限り、ただの過去の写真になってしまうが、自分に起こりえる状況だと想像して見ることで深堀さんの思いが伝わるはずだ。見る側の私達には思いを受け止める責任があると思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの4日間の研修中「平和とは何か」をずっと考えていた。「家族と一緒にいること」「学校に行っていること」「毎日ご飯が食べられること」「健康であること」等々、それらは私には当たり前なことと特別に平和であると意識してないことばかりだった。平和とは何気ない日常なのだと気付いた。そしてその何気ない日常こそが私の幸せなのだと強く思った。

もし原爆が落とされたら、私達の当たり前と感じている日常が全て奪われてしまうのだ。今回、研修に参加したことで平和な日常に感謝し、それを持続させる努力をしないといけないと痛感した。世界で唯一の戦争被爆国である日本に住む日本人の私達が核兵器廃絶について発信していかなければならないと思う。まず私は長崎で学んだことを周囲に伝えていく。私にできることは小さなことかもしれないが、その小さな力を増やしていくことが世界平和に繋がっていくと信じる。

核兵器廃絶と本当の平和とは



郡山市立大槻中学校2年 紺野 煌斗

1 派遣研修への参加に当たって

僕が、派遣研修に参加しようと思ったのは、原爆が落とされたという悲惨な事実や、平和とはどういうことかを自分の目で見て感じようと思ったからだ。現在でもロシアのウクライナ侵攻により、多くの犠牲者が出ている。そのような世界情勢に立たされている今、被爆地・長崎を訪れ、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを伝えていくことが重要と思い、参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、11時2分で止まっている時計や、長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の模型など、原爆や戦争に関する様々なものが多数展示されていた。原爆の熱により溶けてしまった花瓶などの実物も展示されていた。特に印象に残ったのは、人かどうかわからないほど黒く焦げた少年の写真だ。たった一発の爆弾でそのような姿になってしまったと思うと、とても胸が痛くなった。しっかり見て考えなければと思っていても、目を背けたくなるような資料ばかりだ。

また、今まで僕は、原爆のもたらした被害は、放射線によるものばかりに目を向けていたが、実際には爆風による被害が半分を占めているということがわかった。自分が思っていた以上に一瞬にして亡くなったり、大けがをした人が多かったということだ。一瞬で多くの人の人生を奪い、さらに生き残った人たち放射線の苦しみを長く受ける。原爆の恐ろしさを改めて知った。そして、「長崎を最後の被爆地に」というメッセージが世界に届いてほしいと強く思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

研修では、被爆当時18歳であった築城昭平さんの被爆体験を聴いた。勉強をしたいと思っても働きに行かされたり、日本が勝っていると思って「正義の戦争」を信じるしかなかったそう。また、「もし今戦争が起きたらどうなるか」というシチュエーションで、自分の大切なもの、人、場所はどうなってしまうのかを考えさせられ、とても胸が苦しくなった。

(3) 平和祈念式典

8月9日、今年は台風のため、規模が縮小された式典となり、僕たちはテレビでの視聴となった。

しかし、現地ナガサキにいるのだ。長崎市長や被爆者の方の「平和の誓い」の中にあった核兵器廃絶への願い、平和への想いが胸にしみた。



< 平和への鐘 >

3 心に残ったこと

上の写真は、平和公園の「長崎の鐘」である。この写真を選んだ理由は、この鐘こそが平和の象徴だと思ったからだ。

もう二度と戦争が起こらない平和な世界になってほしいという願いを強く感じる。この鐘の音により、犠牲となった方々への鎮魂と、平和を願いその実現への決意が、いつまでも世界中のたくさんの人々の心に響くようお願いしたい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4日間の研修を通して、様々なことを学んだ。戦争のことに関して以前までは、基本的な事実だけしか分かっていなかったが、今回の研修で、実際に長崎の地を訪れ、原爆の威力やそれによる被害、当時の状況などを知り、より戦争について関心が高まり、深く知りたい、考えなければならぬと思った。

これからの課題としては、「核兵器廃絶と平和の実現」である。世論では、「抑止派」と「廃絶派」が存在するが、僕は「廃絶すべきだ」と主張する。なぜなら、核兵器を持たないことで、戦争が起こりづらくなる。核兵器がなくなれば、人が人を犠牲にしたり、苦しめたりする戦争が起こらなくなると思うからだ。

最近では、「核兵器禁止条約」が発効されるも、未だにそれに賛同しない国がある。唯一の戦争被爆国である我が日本も参加していない。なぜ核兵器禁止条約に参加しないのか。世界にはたくさんの国々があって、それぞれの歴史や文化、思想や考え方があるが、世界共通の想いは、「平和」であるべきだ。自国だけが有利であればよいという偏った考え方をなくし、「本当の平和」を目指して、我々は日々生きていかなければならない。僕のこの想いを少しでも必ず周りに伝えていきたい。

長崎の人々の平和への努力



郡山市立小原田中学校2年 景山里桜

1 派遣研修への参加に当たって

私が、この長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは、昨年度の長崎派遣事業に参加した先輩の発表を聴いて、大きな衝撃を受けたからだ。

長崎の町を破壊し、多くの命を奪った、たった1発の原子爆弾の恐ろしさや残虐さ。それを目にした瞬間に私は心が傷んだと同時に、平和の大切さを認識した。そして、この戦争や爆弾を実際に長崎へ行き、見て学びたいと思った。

また学んだことを周りの人達に伝え、戦争の悲惨さと平和の大切さを知ってほしいと考え、参加することを決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

私は、この事業を通じて初めて永井隆博士のことを知った。永井隆博士は、爆心地から700メートル程しか離れていない長崎医科大学の診察室にて被爆した。重症を負いながらも他の被爆者達のために救護活動に当たったという、その姿に感動した。

記念館で永井隆博士が書いた随筆の、いくつかの文を見た時に、私は泣きそうになった。戦争を2度と起こさせないように、自分の体験をもとに戦争や争いの愚かさを、そして平和の大切さと、それを実現させる人の在り方を、彼は強く訴えていたのだ。

私は、永井隆博士が世界に伝えたかったことや想いを後世に繋ぎ、彼の行動を絶対に無駄にしてはいけないと思った。

(2) 原爆資料館

常設展示室に入ると、原爆によって変形した柱時計が最初に目に入った、文字盤が折れ、枠

が歪み、11時2分で針が止まっていた。

少し進むと、原爆が落とされた直後の様子を再現したというエリアに入った、他のエリアに比べて暗かった、原爆投下直後は夜のように闇に包まれたからだと言った案内の方が説明してくれた。おそらく当時の人達は何が起こっているのか理解できないままだったのだろうと思った。

そして私は長崎に落とされた原爆「ファットマン」の模型を見た。長さ3.25メートル、直径2.52メートルと聞いていたよりは小さかった。この原爆1発で長崎の町1つをたやすく破壊してしまえるほどの威力を持っていると知り、改めて核兵器の非道さを理解することができた。

原爆の爆風や熱線、放射線の被害は、すさまじいものだった、爆心地200メートル以内の瓦の表面は沸騰して泡立ち、金属やガラスは溶けていた。建物は吹き飛び粉々になり跡形もなかった。

熱線により黒焦げになってしまった遺体や原爆ケロイドを負った被爆者の方の写真。それらを目にし、再度、原爆がもたらした恐ろしい被害が確かなものだと実感した。

(3) 青少年ピースフォーラム

1日目、被爆者の築城昭平さんの話を聴いた。原爆投下直後の様子だけではなく、自身が受けた熱線や放射線による体への影響についても話してもらえた。今でも左腕の火傷の跡は残っていた。

投下後は原爆の情報は伏せられていたらしく、本人も忘れかけていた時に当時の被害状況を知ったとの事だった。何もわからないまま友人と励まし合い歩いていた時はとても不安だっ



＜ 永井隆博士の書 ＞

ただろうなと思った。

築城さんは、平和の実現を強く訴えていた。

そのあと戦争の疑似体験をした。まず、自分の大切なものや人などをカードに書いた。空襲警報が鳴り響き、ひどくなっていく戦争の中、大切なものが少しずつ失われていき、最後には自分の家族さえ無くなってしまい、とても悲しく、苦しい感情が湧き出してきた。

3 心に残ったこと

私は、この派遣研修で永井隆博士が書いた2つの書が心に残った。

1つは、如己堂の名前の由来になった「如己愛人」という言葉が書かれた書だ。これは「己の如く隣人を愛せよ」というマルコ福音書12章のイエスの言葉だ。永井隆博士はまさに、この言葉のように被爆者の救護活動にあたったのだ。私もこの言葉のように周りのひとを大切にできるような人間になりたいと思った。

もう1つは、永井隆博士が知人や、世界各国の人々に送った「平和を…」の書だ。これは、博士が一番伝えたかったことだ。1,000枚を自らの手で書き、平和への願いを訴えたのである。博士のこの平和への想いをこれからも大切に、実現に向かっていきたい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は長崎で原爆のことを学び、その被害を詳しく知ることができた。それまで、どこか自分には関係ないことだと思っていたが、全くそんなことはなかったと気づけた。

これから、私達はもう2度と戦争を起こさないように戦争の悲惨さを伝え、平和を築き上げなければならない。被爆者の方々が私達に伝えてくれた原爆の恐ろしさを周りの人々に繋ぎ、当たり前にある平和の大切さを今後、世界に広めていきたいと思った。

1日目、稲佐山からみた長崎の町は、78年前に1度原爆に破壊されたとは思えないほどに復興を遂げていた。これはきっと、長崎の人達の強い想いが作り上げたものなのだろうと思った。

私はここで学んだことをこれからも忘れずに心にとめ、平和を大切にしていきたい。

平和な未来を生きるために



郡山市立宮城中学校2年 熊田 菜々美

1 派遣研修への参加に当たって

私がこの長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは、自分の誕生日が、広島に原子爆弾が落とされた8月6日だからである。今までは目を背けてきた原爆や戦争という残酷な現実をしっかり向き合おうと思った。同じ原子爆弾が落とされた場所である長崎を訪れ、原爆について、自分の目で見て自分の身体で感じて、学びたいと思い、参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

原爆資料館には、放射線を浴びて苦しんでいる人々の写真や、跡形もなく黒く焼け焦げてしまった建物の破片など、胸が痛くなるものが多く展示されていた。

私は、多くの展示を見て、原爆は人々の身体だけではなく、心にも深く大きな傷を与えたことを強く感じた。

また、11時2分で止まった時計や「ファットマン」の模型を見て、核兵器の悲惨さ、残酷さを改めて、痛感した。「長崎を最後の被爆地に」という願いを実現するために、私達が、未来へ繋いでいかなければいけないと思った。

(2) 被爆者体験講話

青少年ピースフォーラムの始めに、被爆者体験講話があった。被爆当時18歳で、爆心地から1.8kmの学校の寮にいた築城昭平さんという方のお話を聞いた。たった1発の爆弾で、全てを失ったとおっしゃっていた。実際に体験した方のお話は、一言ひとことに重みと悲しみを感じた。

そして、平和を願う気持ちが人一倍強く伝わってきた。築城さんが望む平和は、「戦争が

なく、ケンカをしないことだ」ということがよく分かった。

また、被爆者の平均年齢が今年で85歳を超え、被爆者たちの高齢化が進んでいる中で、私達が平和のためにできることは何かをとて考えさせられた。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、まず、戦争の疑似体験をした。3種類の色のついた紙に自分の大切な人、大切な場所、大切なものを書いていき、戦争で失っていくごとに箱に入れていくというものだ。そして、最終的に私の手元には、何も残らなかった。戦争が起こると、自分の大切な人やものが何一つ残らないことを実感し、とてもショックで怖かった。自分には当たり前のように訪れる日常が、原爆が落とされたり、戦争が起きたりすることによって、壊れてしまうことを強く実感した。

次に、フィールドワークで国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館などを見学した。被爆者が水を求めて、次々と亡くなっていったため、館内のどこにいても水の音が聞こえる造りになっているそうだ。また、戦没者の名前が書かれている本は、白紙の本もあった。館内を見学したことで、より戦争の恐ろしさや、痛々しさがよく分かった。



< 原子爆弾落下中心地碑 >

3 心に残ったこと

私がこの長崎研修で心に残ったことは、「核兵器のない世界へ」、「戦争のない平和な未来へ」ということの重要さだ。被爆者のお話を聴いたり、原爆で苦しんでいる人の展示を見たりして、大勢の人々が亡くなったことを実感した。それと同時に、心の底から悲しみの気持ちが湧いてきた。なぜ、たくさんの人の命を奪った原子爆弾を開発してしまったのだろうか。そのようなことは絶対にあってはならないことだと私は強く思う。時が経つたび、人間の技術は高度になっていく。その技術を世界平和のために活用していくことが大切だと感じた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、長崎派遣研修に参加して、「平和」な未来を目指すために私達ができることが分かった。それは、平和の尊さをより多くの人に訴えることだと思った。まずは、身近な人たちから伝えていき、平和が当たり前ではないことを知ってもらうことが必要だと思った。

たくさんの仲間たちとともに過ごした4日間はいろんなことを学び、とても思い出に残った。そして、これからの未来を生きていく私達の役目をしっかりと理解し、毎日を笑って過ごせるような平和な未来を目指したいと思う。

伝え続けていくことの大切さ



郡山市立御館中学校2年 滝田梨乃

1 派遣研修への参加に当たって

私がこの研修に参加したいと思ったのは、長崎に落とされた原爆について、授業で学んだ程度の知識しかなかったからだ。

現在、私達は平和に暮らしているが、ロシアによるウクライナ侵攻は続いており、たくさんの犠牲者が出ている。当たり前の生活だと思っていたことが当たり前ではないということに気付いた。

そこで、この長崎派遣という原爆について詳しく学べる貴重な機会をいただき、この研修を通して、平和の尊さ、核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性についてなど、深く学んだことを、多くの人に伝えたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 城山小学校

城山小学校（旧城山国民学校）について知ったとき、一番驚いたことは爆心地帯の中で最も爆心地に近い学校であり、原爆落下中心地から約500mの場所に位置していたということである。そのため被害は甚大で、1,400余名の児童と職員の尊い命が失われた。被爆校舎内には被爆直後の写真をはじめ、遺物や当時の校舎の模型などが展示されていた。被爆前と被爆後の校舎の違いを見たとき、あまりの違いに衝撃を受けた。被爆校舎外には少年平和像が建立されていた。私は、この像が表している、平和を願って立ち上がる姿がとても印象に残った。左肩にとまっているハトは平和の象徴であり、はばたいていくという意味が込められている。像の周辺には千羽鶴が集まっており、この千羽鶴から、二度とこのようなことを繰り返してはいけない、繰り返されないようにしなければなら

ない、という強い想いを感じ、もう二度と核兵器が使われないように、一刻も早い核兵器の廃絶を進めてほしいと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

一番印象に残ったのは、被爆者である築城昭平さんの被爆体験講話だ。原爆から生存したとしても、原爆からでた放射線の影響で失われてしまったたくさんの尊い命がある。犠牲者・負傷者数は合計およそ148,793人、当時の長崎市の人口の半分以上になる。家族を無残にも奪われた多くの人々が深い悲しみを受け、それは今でも続いている。現在世界に存在している核弾頭の数約12,500発もあるということを知り、大きな衝撃を受けた。戦争でおこったことは、絶対に忘れてはならないことであり、伝え続けていかなければならないことだと思った。

(3) 平和祈念式典

台風の影響で平和公園での開催はなくなり、参加することができなくなったため、テレビから視聴となった。午前11時2分、もう二度と核兵器が使用されませんように、長崎を最後の被爆地として、平和な世界になりますようにと心の中で繰り返し願い、原爆の被害にあった全ての方へ追悼の意を込めて黙とうをささげた。平和宣言では長崎市長の鈴木氏が「今こそ、核抑止への依存からの脱却を、勇気をもって決断すべきです。」と訴えた。この想いが核兵器の廃絶につながり、今なお核を保有している国に届いてほしいと心から思った。



< ファットマンの構造 >

3 心に残ったこと

今回の研修の中で最も心に残ったのは、原爆資料館だ。写真、年表、模型、被爆した日用品、当時の様子を表した絵などたくさんの展示物があり、一つ一つ説明が詳しく記されていた。触れられるものもあり、原爆の恐ろしさを実感することができた。展示物の中で最も印象に残ったものは、長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の模型である。実際に見てみると直径1.52m、長さ3.25m、重さ4.5tと想像していたものよりも大きく感じた。しかし、この原爆が投下されたことによって起きた被害のことを考えると、その被害の大きさに声も出なかった。この写真はファットマンの中の構造だ。中心にある放射能を出すプルトニウムは小さいが、その周りには何層もの火薬が重ねられていた。ファットマンは上空500mから投下されたが、それは威力が最大になり、被害が広い範囲に及ぶからだろう。写真には、被爆者の方の火傷の写真があり、心にも、体にも残る傷をみて、胸が苦しく、辛い気持ちになるのと同時に、この恐ろしい兵器を開発したのが人類なのだと思うと、怒りがわいた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、この4日間で平和について考え、たくさんの人と交流し、平和の尊さ、核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を現地に行き、肌で感じてくることができた。このような貴重な機会をいただき、この28人で参加することができて本当に良かったと思う。共に行動し、協力しながら学んだことは一生忘れない。被爆者の方の話を聴くこともでき、戦争で起こったことや原爆の被害を忘れてはいけないと心から感じた。今回長崎に行ったことで、広島や沖縄にも行き、より多くのことを学びたいと思った。平和な世界にするというのは簡単なことではなく、誰もが悩むことだ。しかし、私にもできるとても大切なことがある。それは、戦争で起こったことや原爆の被害を絶対に忘れず、私が学んだことを多くの人に伝えていくことだ。1人1人が命の尊さ、平和の尊さについて考えることが増えてほしい。そしてだんだん平和な世界になっていけばいいと思う。

昔は昔ではない



郡山ザベリオ学園中学校2年 木村美結

1 派遣研修への参加に当たって

私はニュースなどを見て、戦争や原爆のことに
ついて知るべきだと感じていた。しかし、個人
で調べるには限界がある。私の曾祖父は被爆
者手帳を持っていた。曾祖父は原爆が落とされ
たときに被爆地にいたわけではなく、原爆投下
後、兵士として命令を受け、放射能がまだ残っ
ている被爆地に入ったからだ。その話を聞いた
私は大きな衝撃を受け、曾祖父が原爆投下後の
被爆地に入ってどう思ったのかを知りたいと
思った。私の祖母は今でも突然、戦争の時の話
をすることがある。最初は病気のせいかなと
思ったが、終戦から78年経った今でも心の傷
になっているのかなとも思った。体験した人の
気持ちは考えてわかるということはないと思う
が、自分の目で何があったかを実際に見て知り、
その経験を家族、学校や地域の皆さんに伝える
ことが今できることだと考え、参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念式典

本当なら会場で参列する予定だったが、台風
の影響でテレビ中継にて平和祈念式典を視聴し
た。実際の会場ではなかったが今までより真剣
に臨むことができた。長崎市長の平和宣言の中
で、「今核戦争が起こったらどうなるのか」と
いう根本的な問題に向き合うべきだと伝えた上
で「地球から核をなくすしかない」と訴えてい
た。被爆者代表の方の平和宣言では若い世代が
活動していると伝え、未来への希望を感じてい
ると言っていた。これからの世界は私たち若い
世代の意識が重要になることを感じ、自分も今
回学んだことを含め、感じたことをたくさんの
人に伝えようと強く思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムも本来なら2日間の
日程で行われる予定だったが台風の影響で活動
は1日目のみとなった。1日目の活動では被爆
者の築城昭平さんによる被爆体験講話があり、
講話の中で築城さんは「本当は火傷より放射能
障害の方が怖い」と言っていた。ご自身も被爆
後放射能障害で体調を崩されたが、3か月経っ
てから奇跡的に治ってきたそうだ。だが、いま
だに放射能障害で苦しんでいる人、亡くなった
人もいる。実際の話を知ったことで原爆投下
が私の中でよりリアルに感じられた。ピース
フォーラムでは実際に戦時中の疑似体験もし
た。自分の大切なものや人などを紙に書いたが、
空襲や学徒動員などで紙が減り、原爆が投下さ
れたら1枚も残らなかった。無くなる恐怖を体
験し、もしこれが現実だったらと思うとすごく
怖い。また、実際にあったことだと思うと絶対
にそんな世界にはしてはいけないと感じた。

(3) 原爆資料館

展示室にある数多くの展示物は私に大きな衝
撃を与えた。話で聞くのとは訳が違い、本当
に起きたことなのか疑いたくなるほどだった。
11時2分で止まった時計から始まり、折れ曲
がった鉄骨や、溶けてくっついたガラス瓶を見
て、たった一発の威力のすさまじさを思い知ら
された。また、やけどや放射能障害で苦しむ人
の写真を目にし、原爆や戦争は一瞬で日常や被
爆した人の一人ひとりの人生を変えてしまうこ
とが分かり、核兵器をなくすべきだと改めて感
じた。



＜ 永井博士が過ごした如己堂 ＞

3 心に残ったこと

私が特に印象的だった場所は永井隆記念館と如己堂である。永井隆博士は長崎医科大学（現在の長崎大学医学部）で放射線医学を専門としていた医学博士で長崎榮譽市民である。永井博士は原爆投下2カ月前に白血病にかかり、余命3年と診断された。原爆投下により、永井博士の奥さんも亡くなり、自身も重症を負ったが、被災者の救護活動を2カ月間行った。白血病が悪化し、寝たきりとなってからも、著作や「うちの本箱」など平和に向けた活動を行った。復興と平和に向けて努力する永井博士に、浦上の人、特に永井博士と同じカトリックの信者たちが建てたのが如己堂である。わずか2畳ひと間の家で亡くなるまでの3年間過ごし、17冊に及ぶ本を書き上げた。如己堂の広さを数字では知っていたが、実際見るとこの小さな部屋で活動していたとは思えないくらい小さかった。永井博士が著作した「長崎の鐘」の歌は聞いたことはあったが、歌詞などは意識して聞いたことがなかった。「長崎の鐘」には永井博士が平和への思いや経験を踏まえて作られていることを知ることができた。永井博士は自分にできることをやって平和への活動を行っていたことに私はすごいと思った。平和に向けて自分に何ができるかを考えて行動するようにと永井博士に教わった気がする。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は派遣研修に参加して、色々なものを目にし、体験して、核兵器や戦争についてより自分事として考えることができた。今もし核戦争が起きたら地球は大変なことになる。そうならないためにも私たちができることをすることが重要だと思った。私は今回の経験を学校の人などに伝え体験してもらい、今回ホテルで行った戦争や喧嘩の原因を考え、解決策を自分の平和宣言にするような活動を周りの友達と行ってみたいと思った。また、これからも自分から戦争に関係するテレビを見るなど現地に行かなくてもできることをし、知識や意見を深めていきたい。私が皆さんに伝えたいことは「今」という平和な時の尊さだ。普通に生活できることが一番の大切な時間だと思った。だからこそ私は周りにいる人に感謝したいと改めて思った。家族、友達、先生、地域の人、皆が自分にとって大事な人である。私も含め、この文章を読んだ方には「今」を大切に、周りの人への感謝を忘れず生活してほしい。最後に私は未来が平和なものになるかは、一人ひとりの核兵器廃絶や平和への意識が大切になると思う。自分は無力だと思わず、自分にできることを探して行動したい。まずは今回の経験を心にとめ、核兵器の恐ろしさや戦争の恐ろしさ、核兵器廃絶の重要性を伝えたい。

平和の大切さ



郡山市立西田学園 8年 石井 勝

1 派遣研修への参加に当たって

僕が長崎派遣研修に参加したいと思ったのは、小学生の時に広島原爆について調べ、核兵器の恐ろしさについて衝撃を受け、原爆の恐ろしさをたくさんの人に伝えたいと思ったことがきっかけだ。また、長崎原爆については具体的なことをよく知らなかったため、この機会に、当時長崎で何が起こったのか、真実の姿を知りたいと思った。東日本大震災にともなう原子力発電所の事故により、核の恐ろしさを味わった福島県民として、これから先、核にかかわることが原因で苦しむ人が一人でも減るように、自分にできることを見つけたいと思い、この研修に参加しようと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 被爆体験講話

青少年ピースフォーラムの1日目の最初に、被爆体験講話があった。被爆当時長崎師範学校在学中で18歳だった築城昭平さんの話を聞いた。築城さんの体験を聞いて、当時長崎で何が起きたのか、よく分かった。

その頃、九州ではいたるところで空襲の被害にあっていたそうだが、長崎にだけは、まるで原爆が落とされる予兆とでもいうかのように大きな空襲はなかったそうだ。築城さんたちは、日本が必ず勝つと言いつけられて、トンネルの中や軍需工場で働かされていた。まだ学生だというのにスポーツや勉強はしたくてもできなかったそうだ。原爆が落とされたのは、夜勤に備えて寝ていたときで、全身に火傷を負い、特に左腕と左足先は重傷だったそうだ。いきなり全身に大やけどを負ってしまった自分を想像したらぞっとした。

(2) 戦争の疑似体験

被爆体験講話の後に戦争の疑似体験というものがあった。そこで最初に「大切なものカード」というものを書いた。それは自分の大切な「人」「物」「場所」を小さいカードに書くというものだ。

その後戦争の疑似体験が始まる。「戦争が始まりました。」とアナウンスされ、電気が使えなくなり、カードに「ゲーム機」などの電気製品を書いた人はそのカードを回収された。次に男性は戦いに行くようになった。「父親」と書いたカードが回収された。その後も戦争は続き、公共の施設が使えなくなり、「学校」や「友達」、「部活」と書いたカードが回収された。手持ちのカードはほとんど回収された。最初に15枚もあったカードは1枚しか残らなかった。戦争で何か起こるたびにカードが回収され、最後には「自分」と書いたカードしか残っていなかった。戦争をなぜするのだろうか。戦争で何が残るのか。どうして罪のない人たちの幸せをこんなにもたくさん奪っていくのだろうか。戦争というものは、自分の大切なものをすべて奪われる悲惨なものだと改めて感じた。

(3) 原爆資料館

1945年11時02分、長崎に原子爆弾が落とされた。その瞬間の惨状を伝えるものが資料館にはたくさん展示されていた。11時02分に止まった時計。熱で溶けてしまった瓶や弁当箱。焼けただれてしまった人間の写真。見るだけでも胸が痛むような資料ばかりだった。その中に「ファットマン」という長崎に落とされた爆弾の模型があった。78年も前に作られた爆弾でこれ程までの被害が出たのに、技術の発達した今作られた原子爆弾が使用されたらと



< ファットマン >

考えると、この世に原子爆弾はあってはならないと思った。

3 心に残ったこと

僕にとって最も印象的だった場所は、原子爆弾落下中心地だ。ここには、原爆で亡くなられた方々や、被爆者でその後亡くなられた方々の氏名が奉安されている。原爆はこの場所の約500メートル上空で炸裂し、多くの人の命を奪った。

空襲もあまりなかった長崎に原子爆弾が落とされ、あの一瞬でこれほど多くの命が奪われるなんて誰が予想できただろうか、多くの尊い命を奪った戦争をなくさなければならないといけないうこと、戦争のない平和な世界を築いていかなければいけないことを伝え広めていかなければいけないと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣研修に参加して、とてもよかったと思った。他校の人達と意見交換ができたし、原爆資料館や青少年ピースフォーラムに参加して、当事者の話を聴き、戦争の苦しさ、醜さ、そして平和の尊さを知ることができた。長崎で学んだ平和の尊さ、戦争の恐ろしさを伝え広めていき、戦争で誰も悲しむことのない平和な世界を創っていきたいと思った。そのために学んできたことを積極的に他の人に伝え、ボランティアとして核兵器の恐ろしさや平和の大切さを伝える機会があれば参加してみたいと思った。

平和とは…



郡山市立湖南小中学校 8年 増子佳穂

1 派遣研修への参加に当たって

戦争はもう終わって平和な世界になっていると思っていた。だが、ウクライナとロシアでの戦争が始まったというニュースを見てまだ平和な世界とはほど遠いと感じた。

私は昨年度参加した先輩の発表を聴き、世界ではこのような恐ろしいことが起きているのだと改めて実感することができた。私は実際に長崎に行き、もっと戦争について学び、色々な方に改めて「今の生活がどのくらい幸せで嬉しいことなのか」を伝えたいと思った。

私は参加を考えるまでは長崎について深く学ぼうとしなかった。だが、戦争はいつ起きるかわからない身近にある問題だと考えるようになり平和について考えるようになった。

2 派遣研修に参加して

(1) 青少年ピースフォーラム

私たちは、台風の影響により1日目だけの参加だった。そのなかで一番印象に残っていることは築城昭平さんのお話だ。

築城さんのお話の中で

「布団をかぶって寝ていたから助かった。運がよかった。」

と聞き、亡くなっていないのが奇跡なほど酷い状況だったのだと感じた。原爆で実際に被爆を体験した方のお話はとても重く感じた。

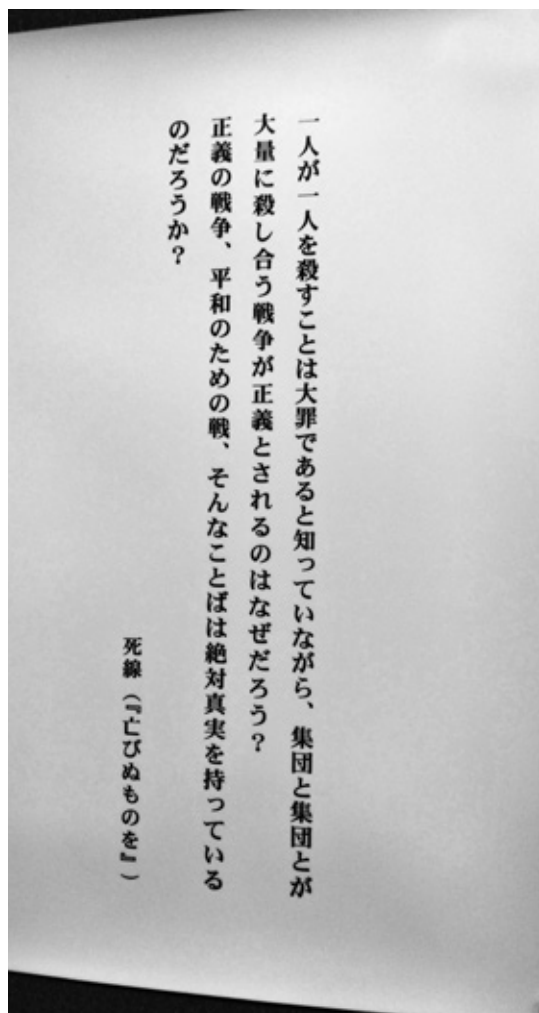
築城さんは睡眠中に被爆をし、全身にやけどを負い、左腕と左足先は重傷だったと語ってくださった。そのお話の途中で今の左腕を見せてくださった。左腕には今も跡が残っていて少し苦しくなった。私たちはお話を聴くことしかできないが、実際に長崎県で起こった悲惨な事実は分かる。その事実を受け止めて戦争につい

てもっと深く考えなければならぬと感じた。ピースフォーラムの交流会では、たくさんの都道府県から集まった方たちと交流を楽しむことができた。台風の影響で残念ながら2日目は実施できなかったが、自分にとって良い経験になった。

(2) 原爆資料館

原爆資料館には、11時2分を指したまま止まっている時計やファットマンの模型などが展示されていた。その中で印象に残っているのは放射線での人体への害が目に見える写真だ。その写真をみて私は胸が苦しくなった。原爆の放射線は人体を刺し貫き、その時に色々な細胞を破壊する。無傷であっても大多数の方が死亡している悲惨な事実を受け止めたくなかった。その他にも、熱線により焼き付けられた影が展示されていた。熱線で焼き付けられた影をみると、「幸せに暮らせていたのだろうか、こんなに簡単にたくさんの尊い命が消えてよかったのだろうか。」と深く考えた。

戦争によってたくさんの尊い命がなくなった事実は変えることは出来ない。しかし、もう二度と起きないようにすることはできる。「長崎を最後の被爆地に」という想いを伝えて起きた事実を忘れずに、もう二度と戦争が無い世界になることを願った。展示がされている所に、点字やたくさんの言語が書いてあるのを見た。多くの方達に実際に起きた恐ろしい事実を知ってもらい取り組みがしてあり、嬉しく思った。世界中の方達が幸せな生活を送って暮らせる世界になることを強く願う。



< 世界へのメッセージ >

3 心に残ったこと

私が一番心に残ったことは、「1人が1人を殺すことは大罪であるを知っているながら、集団と集団とが大量に殺し合う戦争が正義とされるのはなぜだろう？正義の戦争、平和のための戦、そんなことばは絶対真実を持っているのだろうか？」という言葉だ。この写真は永井隆記念館で撮影した。派遣研修の時にこの言葉がずっと頭の中から離れなかった。世界では今でも戦争と共に生きている人たちがいる。だが、「戦争はなにがあったとしても起きてはいけない。」と強く伝えているメッセージを見て、戦争が起きている意味をもう一度深く考えてほしいと心から思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

派遣研修の4日間、初めて会う同い年の方達と友情を深め、協力して活動できた。派遣研修に参加する前はとても緊張していたが、会話を

していくうちにお互い打ち解けることができた。この派遣研修で戦争について深く学ぶうちに平和の喜びを感じた。私は、派遣研修の中で、普通だと感じている日常がどれだけ平和で幸せかを学ぶことができた。

今年度は台風に大きく影響され、平和祈念式典には参列できずホテルでの参加となった。だが、その中でも多くのことを感じ、考えることができた。今の日本はみんなが戦争に怯えずに暮らしている。それは、多くの犠牲者の方のおかげだと思う。これから、私は平和なことが当たり前ではないことを忘れず、日々感謝しながら生活していきたい。

最後に、平和がどれだけ大切で幸せであることを伝えることが今私たちにできることだ。この研修で学んだことを、友人、家族、学校の方々などの多くの人に伝え、戦争について深く考えてもらいたい。

【表紙・裏表紙に掲載されている祈念碑】



「平和祈念像」(平和公園)

郷土出身の彫刻家・北村西望氏の作で、昭和30年(1955年)に完成。像の高さ約9.7メートル、重さ約30トンの青銅製で、「右手は原爆を示し、左手は平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を祈る」という作者の言葉が台座の裏に刻まれている。



「浦上天主堂遺壁」(爆心地公園)

爆心地から約500メートルの場所にあった教会「浦上天主堂」は、原爆による爆風で破壊された。この遺壁は、天主堂南側の壊れて残った壁の一部を移築したものである。



「折鶴の塔」(平和公園)

高さ3mほどの塔。平和祈念像の両側に建ち、平和の願いをこめて折られ届けられた折り鶴を安置している。

「平和の泉」(平和公園)

原爆のため体内まで焼けただれた被爆者は「水を」「水を」とうめき叫びながら亡くなった。

その痛ましい霊に水を捧げて、冥福を祈り、世界恒久平和を祈念するため昭和44年(1969年)に建設された。刻々と変化する水形は、平和の鳩の羽ばたきを形どり、鶴の港といわれる長崎港の鶴も象徴している。



「原爆殉難教え子と教師の像」(平和会館前)

原爆で亡くなった児童・生徒の慰霊のため、1982年に教職員らによって建立された。上に立つ巨人は原爆の脅威を振り払おうとする姿を、下の子どもたちは平和を叫ぶ姿を表している。

令和5年度 郡山市中學生長崎派遣事業 「2023 ナガサキへのメッセージ」報告書

発行日 令和5(2023)年11月25日

発行者 郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会
(事務局:郡山市総務部総務法務課)

〒963-8601 郡山市朝日一丁目23番7号

電話: 024-924-2031

F A X: 024-924-0956

Eメール: soumuhoumu@city.koriyama.lg.jp

郡山市 ナガサキ

検索 

印刷製版 株式会社ヨシダコーポレーション



郡山市

